



ふおーらむ

第7号



図書館サポートフォーラム

目 次

第 12 回「図書館サポートフォーラム賞」表彰式…………… 2

山崎委員長 挨拶

山崎委員長 講評

木原祐輔氏 受賞の言葉

吉村敬子氏 受賞の言葉

中村英二氏（神奈川県立川崎図書館）受賞の言葉

山内 明子「俳句八句」…………… 14

植村 達男「マカロニ、スパゲッティ、ピザの渡来順は」…………… 15

恵光院 白「お婆さまの笑顔」…………… 17

近江 哲史「図書館のある風景（その四）」…………… 20

太田 泰弘「書誌作りは愚直な仕事？」…………… 24

門倉百合子「俳句ことはじめ」…………… 26

京藤 松子「能楽に魅せられて」…………… 28

今 まど子「占領軍 いまはむかし」…………… 31

山崎 久道「記号・解釈・即興」…………… 33

平井 紀子「もう一つの書齋」…………… 36

松下 美子「専門図書館と公共図書館に関わって」…………… 38

水谷 長志「夕張の秋を母と行く」…………… 41

《JSK 創立 50 年・解散記念特集》

末吉 哲郎「1960 年代のネットワーク—情報資料研究会 (JSK) を例に」・ 43

前園 主計「個性溢れる会員の強い熱意」…………… 45

近藤 一衛「「民」主導の先駆的役割」…………… 47

太田 泰弘「ドキュメンテーション技術を取り込む」…………… 47

河島 正光「私にとっての情報資料研究会」…………… 48

井上 如 「感 想」…………… 49

花房 征夫「JSK のこと」…………… 50

第12回 図書館サポーターフォーラム賞授賞式

於/2010年4月13日(火)

喜山倶楽部 光琳の間(日本教育会館内9階)

1. 挨拶

山崎久道氏

(図書館サポーターフォーラム代表幹事)

皆様こんにちは。

代表幹事をさせていただいております中央大学の山崎久道と申します。

今日は、図書館サポーターフォーラム表彰式並びに懇親会にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

この会の目的は、皆さんもご存知の通り、図書館の社会的使命を考え、社会に対する図書館というものの意義と有用性を語って、そういうものを広めてゆくことです。こちらに座っておられる末吉哲郎さんが最初の代表幹事としてお始めになられ、その後、末吉さんが10年くらい手塩にかけてお育ていただいた会で、私がその後を引き受けさせていただいています。

日本国内での図書館というものの立場というものが、強固なものかと言うとそうでもなく、最近よく教育の問題でフィンランドのことが話題になりますけれど、図書館先進国でもあるフィンランドに比べると、大分見劣りがします。事実フィンランドというのは、OECDの学力調査で常に上位に来るわけですが、その背後にある図書館の整備充実ということについて、図書館界の人以外ほとんど誰も知らない。

フィンランドの図書館とは、人口あたりの図書館数でみても、整備の経費ということでも、日本の7倍くらいある。そういうことがあって、あるいは、そういう風な読書環境というものが明確に整備されているなかで、初めて教育が効果をもつのだろうと思われれます。ですから、カリキュラムをいじったり、科目をちょっとかえてみたり、それだけでフィンランドのようになれるかという私は疑問だと思っております。文化政策全体がきちんとした方向性を

持たない限り、この国の教育水準は、上がっていかないのではないかという危惧を持っております。

その意味でこのフォーラムは、非常にさまざまな組織ではありますけれども、ここに集まっておられる方々は、大変な力量とご経験の持ち主ですから、是非その意味で日本の図書館を巡る状況を大きく展開をさせていただけるようなお力をいただければありがたいというふうに思っております。

その意味で、図書館の社会的使命をもっともっと訴えられるよう、このフォーラムの設立のときから末吉前代表幹事の非常に強い思いを受けて、表彰ということを行っております。

これは、図書館について、その社会的使命を広める活動をされた方、国際化に貢献された方、人知れず図書館員の専門性に裏打ちされたようなお仕事ですと続けてきて、その素晴らしい成果を顕彰させていただくということなどが軸になっています。毎回いろいろ議論しながら、表彰者を決めさせていただいて、その方々をお招きして、お話を伺ったり、楽しくみんなで過ごしていただき、図書館というものの明日を考えるというのが、この会の趣旨ということになっております。

ぜひ皆様のお力をお借りしながら、この会を受け継いでいければというふうに思っております。

ですので、よろしくお願いをしたいと思います。

今回は、12回目の表彰になりますけれど、素晴らしい表彰が決まりました。

後でご披露いたしますけれども、そういった意味でこの表彰を今後の日本の図書館界なり、皆様の活動なり、あるいは経営プロセスなりにいろいろな意味でインパクトを与えて、今後の発展につながって行くことを祈念して、今日は皆さんと一緒に祝いをしたいと思っております。どうかよろしくご協力の程お願い申し上げます。ありがとうございます。

2. 講評

山崎久道氏

(図書館サポーターフォーラム代表幹事)

今日は、戸田光昭表彰委員長の代理ということでお話をさせていただきます。

①選考経過

2010年2月23日に開催されました表彰委員会では10組の個人・団体の候補者の中から慎重・審議の末、2名と1団体を表彰させていただくことに致しました。

それが、皆様にご案内したように、「木原祐輔」

様、「吉村敬子」様、「神奈川県立川崎図書館」様です。

この「図書館サポーターフォーラム賞」というのは、基本的に個人を顕彰するというところの方針としております。

しかしながら今回は、特に非常に優れた業績をあげられた図書館ということで、「川崎図書館」に対して皆さんから強い推薦とご支持があったものですから、表彰委員会ではいろいろ審議をした上で、喜んで賞を差し上げるという事になった次第でございます。

従って今回は、2名1団体の表彰になったという事をまずお断り申し上げます。

②講評

では、おひとりおひとりの表彰理由等を読ませていただこうと思います。

表彰理由については、今日配布をさせていただいた資料の中にございますので、ぜひお目通しをいただきたいと思います。

この表彰理由については、今日いらっしゃられなかった戸田光昭さんが、たいへん行き届いた文章をお書きになられておりますので、私はそれをまず読ませていただこうと思います。

まずお一人目「木原祐輔」様、キハラ株式会社社長。表彰理由。

キハラ株式会社の代表を1965年から最近まで50年近くつとめ、一貫して良質の図書館用品を提供してきた。2004年からはキハラ創業90周年記念事業としての「歴史的図書館用品の調査・収集・保存」事業を、日本図書館協会からの委託を受けて先導して行っている。

これは図書館用品の一層の品質向上をはかるとともに、近代日本図書館史研究に多大の貢献をもたらすものである。故清水正三氏が提唱された「図書館博物館構想」を、ぜひ実現できるように、これを契機に、図書館界あげての支援体制ができることへの期待も込めて表彰する。

ご存知のように皆様、図書館用品の世界は、「キハラ」さんが一番ご存知だと思うのですが、IT業界の進歩があつて大きく変わってきていると思います。

私のようなものでもわかるのですけれども、そこには一貫してその資料や情報を保存して、何とか整理して人々に提供して行くんだというそういうスピリットと言うか、利用しやすくして行くんだという精神が流れているのではないかと思います。

とにかくそういう歴史的な図書館の用品とか器具とかいった物は、放っておけばなくなってしまうわけです。ですからいま木原さんがなさってこられてきたことは、いわば歴史そのもの

のを構築するような非常に価値のある試みで、大変に大切な試みであると思います。

これは、かつて末吉さんが提唱されている産業考古学ですね。図書館の経営史一面にもなるのかなという気がします。

きのうテレビを見ておりましたら「クローズアップ現代」で「廃墟を訪ねる」とか、「軍艦島」とかが話題になっていました。なにか、最近は、産業遺産への観光旅行がありますね。

ぜひ昔の図書館とか、「廃墟」という言葉はあんまり良くないのですが、そういうのを見学する会をこのフォーラムで企画したらいいのかななんて気もしています。

キハラさんが前に作られていたカードボックスなんてものは、いま見たことのない学生なんかがいっぱいいるわけです。それによって、図書館のいろんなカードを検索する・並べる。昔は「同じカードを何枚もコピーして大変だったんですよ」なんて言ったって、コンピュータデータベースに慣れた人には、「何でそんなことをしてたの？」というような話になってしまいます。

「書名順で並べたり、著者で並べたり、件名で並べたりするんですよ」というような言ってみても、現物を見せたほうがすぐ早い。

だからキハラさんが昔の図書館用品を展示する施設を作られたら、図書館情報学を勉強す

る学生が実習に行ったり、見学に行ったりすると思うんです。是非そういう立派な図書館博物館を作っていたらいいと考えております。

ありがとうございます。

二番目の表彰の方。「吉村敬子」様、元米国議会図書館（LC）に勤務されていた方でございます。表彰理由を読ませていただきます。

WDC（ワシントン文書センター）に保存され、後に米国議会図書館の現アジア部日本課に移送された、日本の戦前・戦後検閲資料ならびに文書の目録が、前2冊（米国議会図書館発行）に続くものとして、今回「戦前・戦後検閲資料及び文書」全3巻としてまとめられ、2009年7月に文生書院から刊行された。

この目録は主要な資料・文書には注釈がつけてあり、全ての資料・文書は原本にあたった上で、原稿を作成したものである。著者である吉村敬子さんは、東洋文庫、ハーバード大学イェンチン図書館、米国議会図書館などに勤務し、その目録作成の経験を生かし、1998年の退職後に本書をまとめられた。単なる目録ではなく、詳細な注釈がなされた力作である。

長年の経験を生かして執筆された本書を、昭和史研究に必携の貴重な著作として評価し、表

彰する。

皆さんご存知の通り、日本が戦争に敗れた後、占領軍が日本に入ってきて、その後日本の文書を接収して、議会図書館に多くのこういう文書があるんだそうです。

それをその膨大な資料の中で整理をして、どういうふうな文書があるかを明確にされたというところで、本当に日本の戦前・戦中の歴史が手にとるようにわかるような非常に大事な仕事をされたと思います。

目録や文献をガイドするということは、図書館員のないうる非常に大事な仕事だと私も思います。

しかし、いまの図書館員は、「そんなことは図書館員の仕事なのか？」と言うかもしれません。

目録ですらコピーをして、自分の図書館に入れるという時代です。

ですから、本当に自前の資料を自分で整理して、自分でその件名を考え、自分で分類を考えてやるということがどこまで出来るのでしょうか。

そのことが図書館員の非常に大きな使命であり、専門性だったと思うんですね。

しかしいまそのことの認識がむしろ薄れている。だから図書館で、ある情報を整理して電子

的に提供出来る仕組みを作りさえすればいい。情報そのものを整理したり、纏めるっていうことは、図書館員じゃない人がどんどんやって、むしろその方がいいんだという議論もあります。私は、ちよつと違うんじゃないかと思ひます。

やつぱり、情報をきちんと整理して、みんなにわかりやすく提供するということが、図書館員の本質的な部分じゃないかと思ひています。

吉村さんは、見事に、しかしながら非常に大変な労力をかけて、そうした図書館員の専門性を発揮された。

それも、そういう仕事を個人としてされたということが驚嘆に値します。こういう煩雑な仕事に着手され、見事に成果をあげられたという点で表彰させていただきたいと思ひます。

吉村さんには、本当はこちらに来ていただきたいかったです、アメリカにお住まいです、今日は千代さんに代わりにあとでご挨拶をいただきますけれど、吉村さんのメッセージもご披露いただけるのではないかというふうに思ひております。よろしくお願ひいたします。

三番目の表彰の方。「神奈川県立川崎図書館」様。表彰理由を読ませていただきます。

神奈川県立川崎図書館は、1958年に設立

され、50年以上の歴史を有する公立の産業図書館である。県立図書館としては珍しいが、神奈川県立としては二つ目の図書館であつたという事情もあり、一般的な公共図書館ではなく、最初から所在地である川崎市が京浜工業地帯の中心であつたことから、その機関誌を「京浜文化」と命名するほどに、京浜地区の産業発展に寄与することを目指してきた。

いわゆるビジネス支援図書館の草分け的な存在であり、しかも、神奈川県資料室研究会という地域密着の図書館支援組織を図書館設立直後から立ち上げ、図書館が地域を支え、行政も含む地域が図書館を支援し、活用するという理想的な図書館活動を行つてきた。ビジネス支援図書館の先駆として、さらに、神奈川県資料室研究会という支援組織の事務局として機能してきたことを高く評価し、表彰する。

皆様ご存知の通り、最近では公共図書館のビジネス支援というのが流行しております。

しかしながら、県立川崎図書館さんは、当初から図書館運営の柱としてビジネス支援ということ掲げられたわけです。それに関連しているのが、いわゆる「神資研」ですね。この中にも関係の方が何人かいらっしゃるかと思ひますが、「神奈川県資料室研究会」です。この団体もその流れの中で運営されてきているのだと思ひます。

います。

わたしも「神資研」のメンバーの方から何人かお話を伺つたことがあります、が、「神資研」の運営は「川崎図書館」の存在なしには全く考えられない、ということです。

「県立川崎図書館」あつての「神資研」であるということは何人もの方々が異口同音におっしゃられております。

そういう意味で、公共図書館を運営してきたということに對し敬意を表し、この図書館サポートフォーラム賞を贈らせていただくというふうに考えております。

またあとでご挨拶をいただきますが、ぜひそういう風な私どもの意図するところをおくみいただければと思ひております。

③最後に

以上が表彰についてのご紹介でございます、あとは、それぞれの表彰者からいろいろとお話を伺おうと思ひておりますけれども、受賞の皆様に通ずるのは、確固たる信念とゆるぎない実行力だと思ひます。

三者三様に、もちろん分野は違ひますけれど、そういう風なことがやはり大事な事だと思ひます。図書館の活動の中で信念を持つこと。そして実行力を持つてやるということ。

これがいまの図書館員の方たちに対するこの

表彰から贈ることの出来るメッセージであろうかと思っています。

その意味でこういう素晴らしい数々の推薦をしてくださった皆様、また数々の候補を上げて下さった方々、そして幹事会で議論をしていただいた幹事の皆様、そして事務局として煩雑な事務、特に表彰に関する事務は、大変デリケートな部分もありますので煩雑になるのですが、事務局である「日外アソシエーツ」の皆さんが、きちんとやっていただいて今日の表彰式を迎えることができたことを大変ありがたいことだと思っております。以上で表彰経過の説明にかえさせていただきます。どうもありがとうございます。

3. 受賞の言葉

木原祐輔氏

(キハラ株式会社会長)

キハラ株式会社の会長を致しております木原でございます。

今日は、私が日頃お教えていただいている錚々たる先生方の前で、このように晴れがましく表彰をして頂きまして本当にありがとうございます。

なんと申し上げたらよいのか、表彰状をもらうのは小学校の運動会ぐらいしか経験がないものですから、どういう気持ちで頂いたらよいのかと思いました。受賞のことを社内で話したら、やはり日頃営業とは別にこの事業に関心を持って個々の図書館を尋ね歩いてくれる営業マンが大変励みに感じて喜んでおり、感謝いたしております。さらに、やはり先程代表幹事さまがおっしゃられたように、この事業がまだまだ図書館界に浸透しておりませんので、「そういうことをやっている人がいるよ」ということがわかっていただければ、大変ありがたいという気持ちでございます。そういう意味でも本当にありがとうございます。

実はもう20年以上前に図書館のほとんどがIT化されていく時代に、「少しやっておいらいいんじゃないか？」という事を何人かの方からサジェッションいただいたのですが、「いや、それはうちのやることじゃないよ」と「もっと大手にやってもらわないと、とてもじゃないけど続かないです」という気持ちでございました。それで断念しておりました。いよいよバブルと色々経験してきて、新しい図書館が出来てきますと、古い物は無くなっていく一方です。その無くなっていくのを見ていまして、時を失いましたけれども、「何とかしなければいけない」

という気持ちになりました。確か2004年の図書館大会の時に強引にJLAの松岡事務局長さまと竹内愼先生に「こういうものを用意いたしましたから、どうか決裁してください」ということをお願いしまして、始めたのがこの事業でございます。

最初は、図書館協会にご迷惑をおかけしてはいけませんので、図書館協会の名前をお借りしてやりますけれども、

- ・ 図書館協会には経済的負担はおかけいたしません。
- ・ いただいたものは、図書館協会の所有といたします。
- ・ それをとりあえずはキハラで保管します。

というお約束で、はじめました。

ですから、私どもで貰っているのではなく、あくまでも協会のものとしてお預かりしております。協会側のどこか部屋が出来れば、直ぐにでも移転したいと思えます。と申ししますのも、なんだかんだ集めてまいりますと、私共で以前から保存していた古い加工機械などを含めると20坪ぐらいの場所がたちまち埋まってしまいます。カードケース1本を入手しますと場所をとります。そういう意味で、出来れば「どこ

か適当な場所が無いかな」というのがいま一番願っていることとして、国会図書館とかその他の団体にお願いしに行かなければいけないかなと思うしだいです。

どんなものを集めているかと申しますと、当初は家具を集めれば良いなと思っていましたのですが、実際に歩いてみますと用品が結構出てまいります。

例えば、戦前に使っていましたラベルの現物が出てきました。たった一枚のラベルなのですが、「これはどうしようか」と思いまして、持って帰ってきたのはいいのですが、どういう風に整理して、どのように保管したら良いのか未だにわからないでおります。

実際に使用された目録カードも、図書館に行きますともう既に無いのですが、「倉庫に少しほっぽってあった物がありますよ」ということで、それを「少しわけてください」と言って集めてました。中には、成田の図書館のように、筆で書いた目録カードも見つかっていますので、「これもやっぱりとっておかなくてはいけないのだな」となります。

このようにして集めておきますと、「この品物は一体どんな風に使ったのかな」というものが出てきます。もう使った人が退職しており、お尋ねできないのです。私も会社で一番古いの

ですけれども、それでもわからない事が多いです。

極端なことをいいますと、会社の中で謄写版といっても判らないのです。今年のカレンダーの表紙に使いました謄写式プリンターがあります。戸田光昭先生が、日産自動車の資料室で使っていた目録カード複製用のものです。竹内哲先生から古野式として詳しいことは伺っておりましてけれど、いざこれを写真に撮ろうといたしましたら、スタッフは、どういう風に使うのか判らず撮影できないのです。それでしようがなく、私が呼び出され、保管していた原紙に鉄筆で書いて、「これをこうセットしてこういう風にするんだ」と、「だからこういう写真をとってほしい」となりました。

時には、図書館職員が「確かに何かあると思うよ、一緒に倉庫に行ってみようよ」と案内してくれます。倉庫にはいろいろなものや山と積まれています、その中から探してくるわけです。

例えば伊藤伊三郎商店と書いてある箱が見つかったこともあります。

家具などは、正規の手続きをとって貰ってこなければいけないのですが、正規の手続きという事になると、もらえないことが多いのです。官庁の場合、廃棄するのがいちばん簡単なようで、民間に寄贈するというのは大変な事なのだそうです。「国有財産をやるという事は駄目だ」

と、で、「どうしたらいいのですか？」と問答になります、雑談になりました、「いつそのこと僕の前で捨ててくれませんか？ 僕が拾って帰りますから」と言ったのですけれど、それも駄目なのだそうです。ちゃんと廃棄したという書類が必要なのです。

私共の方で図書館に家具を納品いたしました、代わりに古い家具を持帰って処分するという正式な契約を受けることがあります。引取った物の中に保存したい物があります。これを元の図書館に「実はこういうわけとっておきたいのですけれど、許可を頂けませんか」というと、「さあ困った」と言うことになります。「廃棄したものをとっておいて、キハラさんが写真か何かで発表されて、それがどこその図書館のものだといわれたら、僕達の立場が無いよ」という訳です。そういうわけで、集めたのですけれども公開することができない物がかなりあります。

当初はインターネットで写真だけでも公開したいと思いましたが準備は進めたのですが、「ダウンロードされたらどうなるんだ」とか、「これを出版物などに使われたらどうなるんだ」とか、と話になりました、「こちらはそういうことをやってもらうために集めたので、授業を持っている方にはどんどん使って欲しいのです」と言うと、「それはちょっと待ってください」

ということですが、著作権のようなものに、どうも引っかけたてしめします。

写真のコピーやダウンロードなどの問題、そしてどこにあったかという所有者のお名前の公開など、いま行き詰まってとりあえず物品と所在情報を整理しているところです。

家具とか用品は、そんな感じですけど、同時に当時これをこんな風に使っていたという館報などの文献が出てまいります。該当のページだけをコピーさせて頂いておりますが、やっぱり文献も集めなくてはならないと考えています。

その他に私共には、図書館見学をしたときに撮ってきたスライドがございます。元青山学院大学の古賀節子先生がアメリカの図書館を撮られたものを、「もう自分は正式に引退したから」と寄贈してくださいました。また、元慶應義塾大学の渡辺茂男先生のオープンスクールいわゆるインフォーマルな学校を撮った写真とか、元東京電機大学の藤田豊先生が韓国で撮られた写真なども集まりましたので、すべてデジタル化しております。おおよそ、1500枚位集まっておりますので、これらも公開出来ればと考えております。これは、何十年前かの図書館見学ですので、現在と比べますと興味深いものがあります。例えば、大学図書館ですと入口の近くに

目録カードケースがずらりと並んでいます、今ではそこにコンピュータがずらりと並んでいます。

故清水正三先生の「図書館の博物館構想」というご提案がありましたが、そこまで持つてゆくのにどうしたら良いのだろうか。経済的にも、資料をどう解説したらよいか、などかなりのハードルがあります。

「スノーペーク」という商品を、おそらくこの中の大学関係の方々は覚えていらっしゃると思います。タイプライターで打ち間違えたときに修正する白いペンキですが、当初は日本にはなくて外国からわざわざ買ってこられたものです。その後国産品が出来ましたけれど、これほどのような時に使われたか解説しないと、ただの「修正液でしょ」というだけで終わってしまいます。

また、Gペンと呼ばれるペン先がありました。これで書くときと多少太い字がうまく書けるのだそう、ラベル用にお使いになったそうです。そんなことで、是非お願いしたいのは、われわれのわからないときに、ここにいらっしゃる先生方は、幸いベテラン揃いですので、どんな風に使ったか、どんな苦労があったのかをお聞かせいただければ、今後整理して行く時に、出来るかぎりのコメントを付けてゆきたいと考えてお

ります。

特にカード用紙の大きさの変遷や、複製技術の移り変わりには、興味深いものがあります。謄写版やゼロックスを使ったり、専用のコピー機が開発されたり、皆さんが苦労して使ったわけです。とうとう最後は、「面倒くさいからセンチではなくインチの用紙にすれば、コンピュータで簡単に打てるよ」ということで、カード用紙の大きさを変更したこともあります。

国際標準といわれる「12.5×7.5cm」のカードですが、いつ日本の標準として公認されたかを示す文献が見つからないのです。もし見つかりました是非教えていただきたいと思っています。私が知っているのは、「図書館雑誌」の表紙にアメリカのLCのカードが紹介され、「国際標準の目録カード」として大きさがでております。

そんなことで結局、文献もあたらなくてはならないということになります。いまはもう「とにかく関係したものは何でも集めちゃおう」という気持ちです。

その他にもう1つ大きな問題は、セキュリティの問題があります。「集めた方がいいが、これを燃やしちゃうたらどうなっちゃうのかな」という不安があります。これに保険をかけておけばいいのかなとは思いますが、いまのところは、私共の商品と同じように、南越谷市にあ

ります商品センターの一面を仕切りまして、保管しています。

最後に、集めた資料をなるべく早く公開できるように、少し格好をつけたいと思うのですが、もう少しお時間を頂きたいと思っています。いずれはWEB上か、あるいは私共の方で見ていただけるようにするか考えなければいけないと思います。

今後ともそういう意味で、使い方それからどこに何があるはずだとか、どこそこにどんなものがあつたよとか、情報を是非お教えて頂きたいと思っています。

目下私が一番集めたい物は、間宮不二夫先生がお作りになった家具です。いまスチール書架とカードケースは手に入つたのですけれど、新聞閲覧台とかキャビネットとかを探しております。あれはがっちりしたものですから、多分捨てないで倉庫の片隅に眠っているのではないかと期待しております。また、図書館用品関連業者の戦前・戦後すぐのカタログ類が何とか残っていないかと思っております。

取り留めの無いお話で恐縮でございますけれど、今後も努力いたしてまいりますので、どうぞよろしく願ひいたします。本日は誠にありがとうございました。

吉村敬子（よしこ）氏 （元米国議会図書館勤務）

※表彰式に参加不可能なため、千代由利氏に代読をいただきました。

このたび図書館サポート・フォーラムより表彰を頂くことになり、身に余る光栄と存じます。

私が解題目録の仕事に始めてたずさわったのは、米国議会図書館（LOCと略す）発行の^①Guide to Japanese Reference Books, Supplement 作成でした。その後1981年に、

LOCの目録部門からレファレンス部門アジア部日本課に移り、最初に与えられた仕事が下にご説明するWDCコレクションと呼ばれる資料群をマイクロ化したもののチェックリストを作ることでした。マイクロフィルムは目録がないと使うことができません。毎朝3時間ぐらいマイクロフィルムを読みながら、ノートを取っていました。そのうち首が回らなくなり、セラピーに通う始末となったこともありまし

た。まもなく期限付きの仕事がふえ、WDCマイクロ化資料の目録は仕事時間中に出来なくなりまして。この資料群の重要性を考えて、自分の時間で続けようと思い、一日の仕事が終わってから夜深閑とした建物で、自分の机の上のランプ以

外は真つ暗の中で毎日この仕事を2〜3時間しました。夜8時半ぐらになるとコツコツと靴音がして警備員が回ってくるのですが、顔見知りの警備員と分かるまでは緊張したものです。帰宅後其の日の原稿をタイプする毎日でした。其のうち同種類の資料で、マイクロ化していないものが見つかり、順次これもマイクロ化して目録に加えることにしました。

^③この資料群の目録が1992年と1994年に一冊づつ、LOC出版局から出版されました。

その後病を得て退職しましたが健康を取り戻した後、資料マイクロ化の準備や、データの採取に図書館に通い、後は家で出来る仕事のみとなったところで又、入院療養となりました。その後同出版局がこの種の目録の出版を停止したので、その後たまった原稿をコピーして、2〜3の方に送付しましたところ、早稲田大学の山本武利先生が出版の労をお取りくださり、文生書院から昨年出版のはこびとなりました。

今回出版の三冊に載せた大部分の資料は、資料のマイクロ化準備と目録化を同時に行いました。2・3枚の文書がこより、錆付いた虫ピン、クリップ、ホチキスなどで留めてあるのを、極度に弱っている紙を破らないようにはづすこと、文書類はリールごとに通し番号を各ページに紙を破らないようそつと書きこみました。持ち上げようとするとパラパラと破片になって落

ちるようなものがあり、又南洋庁関係資料には、戦禍のため消火の水をかぶり、それが何十枚も一緒に折れて固まっていたりしたものがあり、その類いの資料はそのまま図書館の保存修復部に持っていく、そこで厚く紙が固まったものは、全部を新たに湿らせてから一枚一枚ピンセットとへらで挟んでそとはがし、別の和紙に一枚づつつけて、平に重しを載せて乾燥させるとか、パラパラと抜け落ちた紙片をジグソーパズル宜しくピンセットでつまんで、適合する穴に一つづつ当てはめるなどの作業を手伝ったこともありました。また弾丸の破片が厚く綴じた一冊の奥深くまで貫通していて、其の軌跡が焼け焦げていたり、戦禍のなまなましさを感じられるものもありました。又グループごとに、保存箱を作成してもらって、請求番号や題名を箱に書き込んだり、マイクロ化準備のための題名の紙やリール番号の紙などのタイプ、総駒数や費用総額を計算して書類を作る作業なども時間のかかることでした。

私が携わったWDCコレクションは、ワシントン・ドキュメント・センター(WDC)に一時収納されていた資料のうちLOC日本課に移送された日本の資料で、日本の占領期に東京におかれたWDC出張所が集めてワシントンに送付した、^⑤日本の官庁や南満洲鉄道株式会社東京支社、警視庁、鳥取県、千葉県などの文書

や出版物が主となっています。その他、占領期にGHQの下の間検閲局が検閲した占領期出版物、直接現地から送付されたと思われる南洋庁関係資料や、太平洋戦域で捕虜から没収したようなものもあり、極く少数ながら、元々米国の官庁機関などが集めた資料で不用になったもの、米国内にあった日本機関の蔵書の一部も入っていました。

文書類はWDCから米国立公文書館に移送され、東京国際軍事裁判に使用された資料などを除く文書類は、後に日本に返還されました。LOCには出版物が収納されましたが、一部分文書類が混入しているのが順次分かり、これら文書類は1992年の目録と今回の目録に記録されています。

今回の目録に記録されたWDC資料群は大別すると、①被検閲出版物及び検閲関係資料と、②課報関係資料になります。^⑦終戦前内務省警保局で検閲を受けた出版物、戦時中米国カリフォルニア州北西部のツールレーキにあった日系人戦時収容所内で発行の雑誌「鉄柵」^⑧で米国連邦捜査局の検閲を受けた印のあるもの、戦後占領期に民間検閲局の検閲を受けた雑誌の一部があり、占領期の雑誌は良く知られているメリーランド大学図書館蔵のプランゲ文庫との比較が記入されています。課報関係文書類の主なもの

に、終戦前日本の左翼・右翼運動、軍関係、横浜事件関係、中野正剛関係、日中関係、満洲、アジア、朝鮮関係、終戦直後の日本の社会情勢などの資料があり、その他各種の資料は、主題^⑪等の索引から検索できます。題名だけでは内容が分からないものは、解題を英文で入れましたので、日本人以外の研究者にもご利用いただけます。

このたびの表彰のお陰で、この貴重な資料群が研究者の方々に、より広く知られて活用されますよう願っております。古賀節子先生始め表彰検討委員会の諸賢に、心から感謝いたします。なお、私に代わってこの会にご出席くださいました千代由利氏に厚く御礼申し上げます。

中村英二氏

(神奈川県立川崎図書館館長)

本日は、栄えある「図書館サポーターフォーラム賞」を頂戴することになりました。大変私共職員一同光栄に思い、またその責任も重大になると感じているところでございます。

このお話を伺いまして、3月中だったと思いますが、職員一同大変喜んでいたという話を

承っております。

私自身は、この4月1日から県立川崎図書館長とそれからもう1つの県立図書館、横浜にございますけれど、こちらは単に県立図書館、この2つの図書館の館長を兼ねるということで、横浜に行ったり、川崎に行ったり、なかなか席が暖まらない。但し、給料は一人分だけであります。

今申しましたように県立の図書館は、2つございまして、川崎図書館は昭和33年に開館を致しました。

それに先立つ4年前の昭和29年のことです。横浜の紅葉ヶ丘ですけれど、江戸末期、横浜開港が決まったときに、山の手に神奈川奉行所が置かれることになりました。そこが本所になりますね。それから、神奈川運上所という、一種の貿易関係・外交関係の出先機関のようなものがございます、今の神奈川県庁は、運上所の跡にございます。

いま県立図書館のあるところが、もともとの神奈川奉行所ということでございまして、神奈川県庁発祥の地ということになります。

これが昭和29年に県立図書館を開館しまして、その当時は、総合図書館という位置付けでございました。

昭和30年代に入りまして、その頃からだんだん日本の戦後の成長がはじまるということで、

京浜工業地帯の中核都市である川崎市にも是非図書館が欲しいという運動が当時あったようでした、しかしまだ当時川崎の市立図書館がなかなか整備が出来ない状況がありまして、地元 of 川崎市からもぜひ川崎にも県の図書館をというような運動があったようです。

県からいえば、重化学工業の発展と切っても切れない縁がございまして、「それでは県立の図書館を作りましょう」と、但し2館目ですの、当初から工業図書館というような形でした。とはいっても、地域に貢献しなければなりません。併せて「2足の草鞋」ではなく「1.5足くらいの草鞋」、一般向けの図書も収集することとなりました。

その後もいろいろ経緯がありまして、平成10年に「もう一度図書館のあり方を見直そう」ということになりました。戦後も相当時間を立ちますと、市町村の図書館の整備もかなり進んでまいりまして、今、川崎の駅前の非常に立地の良いところに市立の川崎図書館がございます。そういった事情もございまして、「もう一度、県立川崎図書館のあり方を見直そう」ということとなり、平成10年に「科学と産業の情報ライブラリー」ということで、「自然科学と産業系のコレクションに特化します」ということを改めて決めました。この時点で一般図書のものは、殆ど県立図書館に移管したり、市

町村の図書館に譲ることで、コレクションを整理しました。

その路線に則りまして、平成17年には1階のフロアを「ビジネス支援室」として、改めて整備しました。

先程もご紹介にございましたように、もともとは、川崎図書館はある意味でとてもユニークなものでございますが、これを時代の要請によりマッチする形でもう一度整備しなおしたということで、例えばこの中で特許と発明に関するご相談ですとか、起業のご相談に応じるような体制を整えております。

これらの活動も含め、開館して今年で52年が経ちます。

開館当初から、工業系・産業系（の図書館）ということとございまして、社史のコレクションを特に以前から系統的に行っておりまして、お蔭様で現在のところ約1万5千点程の社史のコレクションがございます。

これだけのコレクションというのは、なかなか他の図書館では無いのではないかとありますがたにお言葉を頂戴いたしております、私も図書館長に就任して、館内を見ますと、確かにいろいろな企業・団体の社史がたくさんございまして、その中には、言葉で表すのはなかなか難しいようなユニークな社史もございます。是非一度（当館に）足をお運びいただきまして、現物

を手にとっていただけならと思います。

こういった社史ですとか、なかなか入手したいような雑誌類のコレクションが相当特化してございます。

こうしたコレクションができるに至ったその大きな要因の1つとしまして、先程もご紹介いただきましたけれど、「神奈川県資料室研究会」という団体がございます。

これは県内に事業所等の拠点を置く企業の方々を中心にしまして、それぞれの企業で様々な図書室を持っていたり、資料室を持っていたりということでございますけれど、それらの情報交換を密にしようということで、これも(図書館が)発足してまもなくこういった連絡組織が立ち上がったということです。

現在99社の正会員の方に加盟していただいております、この連絡組織があったればこそ、様々な社史のコレクションができましたし、通常ではなかなか入手できないような特殊な文献ですとか、雑誌等のコレクションを形成することができたのだと思います。

川崎図書館の建物は、もう数十年経っております、実はもうかなり手狭になっておりまして、どこの図書館でも収蔵問題で結構頭を悩ませておりますけれど、当時の知恵者が一計を案じまして、今から6年程前に高校の再編などで空き校舎になった、元高校の校舎を使いまし

て、そこに神奈川県資料室研究会等からの様々な企業の資料室に蓄積されていた資料16万点位を高校の空き教室を使ってデポジット・ライブラリーとし、共同保管庫として収蔵庫の手狭さを何とか切り抜きました。こんな工夫もしております。

折角の機会ですので、少しPRをさせていたきたいと思います。

私共の川崎図書館、公共図書館としては非常にある意味でユニークなコレクションで、なかなか他に類例が無いのではないかと思います。が、実は特色はそれだけではないのでございまして、図書館というと、いろいろな文献を閲覧できる、必要があれば貸し出しを行う、そういうイメージが一般的にまだ根深いかと思うのですが、座して待っているだけでは、これからの時代、社会的に認知されないというような意識が強く、ここ数年来様々な講座ですとか、普段図書館になかなか足を運ばれない方々にも関心を持っていただけるようないろいろな機会を持つというじゃないかということで、こういった物に非常に最近熱心に取組んでおります。

3年程前サイエンスカフェという、講座ほど堅苦しくないけれど、いろんな楽しい話が聞けるし、場合によっては講師の方に質問のできる、こんな事業をサイエンスカフェと銘打ちましているいろんなテーマを取り上げてきておりま

す。

例えば、「偽科学にだまされるな」というキャッチコピーを付けてやってましたところ、予想外に多くの方々のご参加をえることができました、当初1回30人位を想定していたのですが、ケースによっては200人位の応募がありました、一日に1回でなく2回やる羽目になったとか、そんなこともございまして、そういった催しをきっかけに川崎図書館に足を運んでいただく、こういう活動が今非常に盛んになっております。

私共のスペシャリスト、司書でございますけれども、見方によつては美術館・博物館の学芸員のような能動的な活動にかなり特色がございします。

そういうことで、私共今回の受賞を1つの励みにいたしまして、寺山修司が「書を捨てよ、町に出よう」といつておりますけれど、図書館ですから、書は捨てちゃいけないですね。「書を持って、町に出て」、積極的に社会的に認知されるような、そういう図書館活動を継続していきたいと思っております。

取り留めの無い、脱線したお話でしたが、本日は本当にありがとうございました。

脚注

- ① 日本の参考図書 補遺版の英語版（LOC、1979）
- ② 例えば、議員のための翻訳、来館者、手紙、電話、（後にはEメール）のレファレンス、蒐書業務、書庫の未整理資料の整理や目録準備、展示や講演会の準備と関連書誌作成、訪問者の案内、通訳、他の部署との会議資料の準備、後には日本課の週間・月間リポート作成など期限のある仕事
- ③ Japanese Government Documents and Censored Publications : A Checklist of the Microfilm Collection = 日本の公文書及び検閲資料（1954年以前）：マイクロフィルム チェックリスト（1962）と Censored Japanese Serials of the Pre-1946 Period : A Checklist of the Microfilm Collection = 検閲和雑誌（1945年以前）：マイクロフィルムチェックリスト（1994）
- ④ 以前はLOCのPhotoduplication Serviceの方でしていた仕事。
- ⑤ 内務省、外務省、陸軍関係機関、内閣情報局、など
- ⑥ Civil Censorship Detachment (CCD)
- ⑦ 図書、雑誌、パンフレット、ビラなど。
- ⑧ 日系人によって発行されていた、不定期刊の文芸サークル誌。
- ⑨ このコレクションは、前国立国会図書館司書星美恵氏が二年がかりで整理、館蔵カードの作成をされたものに基づく。
- ⑩ この比較は、当時早稲田大学院生の岡崎倫子氏が同大学教育学部和田敦彦教授の指導の下に行われたもの。
- ⑪ このほかLOC所蔵のWDCコレクションのうち南満洲鉄道株式会社の出版物は、「旧植民地関係機関刊行物総合目録」COMP（アジア経済研究所、1979）にリストされ、軍関係の資料は、「米議会図書館蔵占領接収旧陸海軍資料総目録」田中広巳編（東洋書林 原書房発売、1995）にリストされている。
- ⑫ 千代氏はLOCに国立国会図書館から出張され、南満洲鉄道株式会社出版物のうち国会図書館にないもの3270点を選んでマイクロ化する仕事を1984年までされた。

俳句八句

山内 明子

暮の恋謙信不犯通しけり

種袋封を切るなり指にはじき

発車ベル鳴るまでビール飾りをく

キリンビール A s a h i 名入りのコップにて

青蚊帳に男をひとり生捕りぬ

この水着かつて着たとは思はれず

もりそばに一盃の酒かくるや涼

ただいまと云ひ秋灯のひもを引く

マカロニ、スパゲッティ、ピザの渡来順は

植村 達男

画家小出栖重が、大阪から芦屋に転居したのは、元号が大正から昭和に代わる頃、西暦でいうと1925年前後ということになる。芦屋に住んでから、栖重は神戸にちよくちよく出かけるようになる。栖重の長男泰弘は、その随筆集『絵日傘』（1983年、リーチ出版）所収の小文「赤い支那下駄」の書き出しに「栖重は神戸が好きだった」と書き、栖重が好んだ神戸の風物の数々が列挙されている。風見鶏のついた異人館やメリケン波止場には、「まるで興味を抱かなかった」栖重であったが、店頭に並ぶ西洋骨董、古風な洋家具、西洋人向けの食品類に興味を持ったようだ。チーズ、サラミソーセージ、キューカンバー（キュウリの酢漬け）、焼豚、そしてフランスパンやマカロニ。ある日、南京町で「変わった履物」を見つけ、栖重は購入する。これが小文のタイトルとなった「赤い支那下駄」であった。マカロニと鳴る支那下駄。栖重は、この下駄をことのほか愛用し、何足も買

い替えたそうだ。泰弘によると、この支那下駄を改良して作られたのが、今日のサンダルだという。

「赤い支那下駄」という文章を読んで、私はマカロニという単語に惹き付けられた。昭和初期の神戸ではマカロニが売られていた。その証拠となる文章である。小出栖重が死去したのは1931年（昭和6年）。少なくとも、それ以前に、神戸でマカロニを購入することが可能だったわけである。私の母は、同じ時期に芦屋に住んでいた。母の兄、すなわち私の伯父と小出栖重の長男泰弘とは精道小学校の同級生だったとも聞いている。母も小学生時代マカロニを食べていたに違いない。母は、その後銀行員だった父親が名古屋に転勤になり岡崎市に住む。

結婚、出産、戦争、戦後の混乱期を経て、母が再び阪神間に住んだのが1955年（昭和30

年）の夏のことである。このときは神戸市に編入されて間もない御影に住んだ。中学生だった私は、神戸に住むようになってから、初めてマカロニを食べた。東京・世田谷に住んでいた頃にマカロニを食べたという記憶は全くない。マカロニの味付けは、トマトケチャップである。恐らく、母は子供時代に食べたマカロニを、神戸の大丸あたりで見つけた。そして、懐かしく思い購入し、作ってみたのであろう。これは、私の推理である。この推理を確かめようにも、母はこの世にいない。日本人は、いつ頃からマカロニ（そしてスパゲッティ、ピザ）といったイタリア産の食材に接したのだろうか。そんな疑問を解決してみようと、『日本国語大辞典』第2版（平成12年）を参照してみた。その結果、マカロニ、スパゲッティ、ピザが、初めて現れた文献は以下のとおりであることが判明する。

マカロニ

仮名垣魯文『西洋料理通』（1872年）に、「マカロニスープ」の記述があり「素麺汁」とコメントされている。

スパゲッティ

ハリー牛山『モダン化粧室』（1931年）に、澱粉性食物一皿の記述があり、その後に「マカ

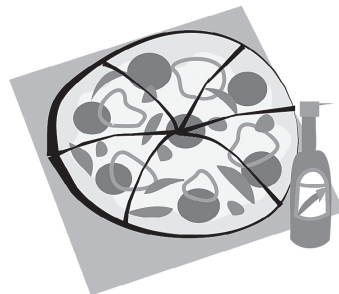
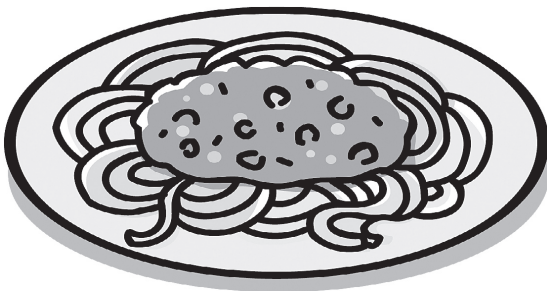
ロニ、スパゲティ（ママ）、豆、芋類等」とある。
なお、古川ロッパ日記の中で、昭和11年9月11日にスパゲッチ（ママ）を食べたという記録がある。

ピザ

古川ロッパ『新版洋食記』（1955年）に、「僕は然し、イタリア料理なら、ピザ・パイで、キャンディーってところ」とある。

以上のように、マカロニ、スパゲティ、ピザの日本到来は、マカロニがダントツに古く明治期。つづいて昭和戦前期のスパゲティが続き、戦後になってピザが入ってきたというところか。私の食べた順番も、マカロニ、スパゲティ、ピザの順番だ。マカロニは、マカロニグラタンという料理名で日本人には古くからのなじみのようだ。ところで、メニュー上に書かれるマカロニグラタンは、macaroni au gratin（フランス語）。ところが、この macaroni という単語をイタリア語辞典で引いても出ていない。イタリア語では、maccheroni と綴る。我々が使用しているマカロニというコトバ。もちろん、本家本元はイタリア語なのであるが、フランス語（英語も macaroni）を経由して入ってきたコトバのようだ。英語の辞書を引くと macaroni のところに、「大陸帰りのシャレ男」

というコメントが出ている。島国のイギリスからイタリアを旅行して帰ってきた「女たらしの術をつけてきた嫌な奴」という解釈なのである。



お婆さまの笑顔

惠光院 白

そのお婆（バ、）さまの名前を私は知らない。

ここでは仮りに「村中・田鶴（タツ）」さまと呼びたいとおもう、もう遙か60年も前のことである。当時小学生だった私は、夏や冬の休み、連休の時などは親戚の家に泊まりがけで行くのがいつもの事だった。その叔父の家では姉と手分けしながら朝夕の手伝いはもとより、鶏の世話、子守りや町へのお使い、田や畑仕事の叔父・叔母のもとへ昼の弁当やお茶などを届けること等が、毎日の日課であった。特にそれが労働だとか仕事とは殆ど考えもせず、ごく普通の日常だと思っていた。そんな中でも、車の殆ど通らない、舗装もされてはいない、幅も広くはない国道で、近所の子供たちと遊んだり、蜻蛉（トンボ）や蟬を捕まえたり、また昼寝やお習（サライ）の時間もあつたはずである。成人後には全く考えられない里山の生活、充足した時間を過ごしていたと言えよう。

そのような日々、しかし夕食の直前、何が何

でも為さねばならない言い付けがあつた。近所だが子供の足で徒歩10分くらいかかる或る家に、夕食（翌日の昼食までの量）を届ける用事である。暖かいご飯とお総菜（カズ）の鍋とを持って出かけるのである。暗くて足元が怖からうと、大雨だろうと、雪が吹雪いていようと、出かけるのである。他に荷物のある時や、雨の時などは背中に風呂敷包みを襷（タスキ）がけで、ずぶぬれ覚悟で出かけた。

その家にはあるお婆さまが一人で住んでいた。村中・田鶴婆さまである。家というより納屋に近い、裸電球一つの粗末な室内だった。ただ当時、私は豪華な住居は見た事がなかったのだ、粗末だが貧しいとは感じなかった。その家には飾り物のもとより、無用な家具は無く、土間には履き物が無かった。その家を訪れるとお婆さまは、奥の部屋からいつも飛び出してくる。その動作は私の少年期の言葉では語れるものではない、お婆さまは立てないのである、歩けな

いのである。私はそのような進み方を、膝行（イザ）と言う事を後年に初めて知った。お婆さまは病気で臥せっている時などは、殆ど匍匐前進（この言葉も後年覚えた）で囲炉裏（イロリ）の傍まで出てきた。

それから約五分程が、お婆さまの笑顔と少年の私との短い時間だった。お婆さまはどんな時でも姉さん被（カブ）り、木綿の手拭いで頭を覆う当時普通の働く女性の被りものをしていった。何を話したのか全く覚えていない、多分とりとめない話だったであろう。帰りは何かの菓子包みや折鶴、姉に手渡すお手玉など、また鍋や食器類を持ち帰ったように思う。ある時は繕い物の依頼でお婆さまの所へ、濡れないように油紙にくるんで持参した事もある（この僅かな針仕事のみが、彼女の大切な収入の道だったろうか）。それに偶にだが月遅れの婦人雑誌なども、記憶のスミに残っている。何かの到来物や季節の水菓子（果物）などを届けたこともあり、お祭りの時などはお赤飯やお餅だったはずである。

そのお祭りの時なのだが、近く神社の例大祭の直前、山上の本殿で叔父などが列座しての何やら難しい（大人の言葉では、厳かな）儀式が執り行われていて、無論子供達には中に入れない。その時間はどの屋台、出店も全てが整ってはいても、まだ物を売ってはいけななし、金銭

のやりとりは駄目、要するに未だ神様からお許しがない、つまり聖なる神事の時間であった。その儀式の終りが告げられ、石段各所の露店などが浴衣姿の人々で賑わい始めた頃、少年の私はあちこちの出店の間を、小遣いのあれこれを思案しながら、うろろろしていた。その時である、急な石段を体の大きな叔父が、あのお婆さまを帯で背負って、勇躍登って来たのは。「うちのお婆さまのお参りだぞ、どいた、どいた」と大声をあげながら。小さな体のお田鶴婆さまは、いかにも嬉しそうな表情で、しっかりと叔父の背中におさまっていた。

過ぎゆく年月はしかし無情である。村中・田鶴お婆さまはその家を出ることになり、「ヨウロウイン」という所に行く事になったと聞かされた。ある日、お婆さまは叔父の引くりヤカーの板と莫塵（ゴザ）を敷いた上に、身の回りの物は風呂敷の一包みだけで、ちょこんと座ったまま、いつもの姉さん被りで、近所の子供たちや僅かな大人たちに短い言葉で礼を言い、永のいとまを告げ、叔父の低い促しの声で、リヤカーは去っていった。寂しいような、空しいような、「さいなら」（当時の方言、さようなら）と大声で言いたいような、未永く養生して長生きしてネと（大人ならば）声をかけたはずの場面が流れた。程なく道の角から消える時、お田鶴婆さまは、深く頭を下げ、頭の先で合掌する姿が

見えた。涙顔の少年だった私は、寺社やお墓、仏壇へではなく、人間にも両の手を合わせるという事、またそれが何なのかを、幼い脳裏に知らされた瞬間であつた……。

しかしその後は、お婆さまの事はいつしか忘れ、記憶は茫漠の中へ遠ざかつて行つた。

時は約20年も過ぎてから、フト私は母にあのお婆さまの身の上を尋ねた。母は色々なことをかいつまんで話してくれた。田鶴さまの少女時代、つまり明治の後半だという。小学校を終えても進学の道へは通例ならず、家事や近所の手伝いなどをしていた時期、田畑の仕事はまだ無理な年齢、それが少女田鶴ちゃんの日々であつた。或る日、（叔父の）祖父の家の子守り、乳児を背負い和装に下駄（草履？）履きの少女は、何かに躓いて足を踏み外し、背中の乳児を必死に守ろうとして、膝と足を挫じき、大怪我を被つた。昭和平成の現代ならば直ぐ救急病院に運ばれて、まずは応急処置を施される筈の場面である。しかし明治後半期、町はずれの農村地帯、設備の整つた大病院などはない。無論健保の制度はない、色々手を尽くしても高額な治療費と救急処置の遅れ、その上それ以後の長期の養護の問題がからみ、非生産的な事には金銭はかけられないという絶対の現実の前に、問題はこじれた。彼女の実家と（叔父の）祖父の家との話

し合いで、少女田鶴は、（叔父の）祖父の家で一生を面倒見る、という解決策になったという。つまり厄介である。『厄介』とは古くからの言葉で、『隠居』などと同じく制度的な含みで、引受け手の所在がはっきりしている人を言うとの事であつた（私はこのことを後年に知つた）。

以後の少女田鶴ちゃんからお田鶴婆さま迄の生涯は、私の中では空白である。叔父の家は代々、乳児を守つた田鶴さまの一生を万全ではなくともケアし続けた。その乳児が誰なのかは私は知らないし、お田鶴さまの墓も知らないままである。しかし彼女の生涯は明治く大正く昭和前期、我が国全体が未成熟で福祉の考えもゆき渡らず、車椅子もまだ、身体障碍者が意味もなく蔑まれ、豊かと言えない農村、結婚はもとより蓄えとて無く、深い雪に何ヶ月も難儀する土地柄、何よりも自らの意志さえママならぬ場所、ぼつねんとして諦めだけが通り過ぎていったという状況が、只々想い起こされてくる。それ故偶に、リヤカーが男衆に背負われて行つた筈の、温泉に浸かる事のみが無上の喜びであつたかと想像される。しかし彼女にとっては一人暮らしや我が身の不如意ではなく、人々と共に農作業に出られなかった事が何よりも心の重荷だつたであらう。それ故あの姉さん被りは、働く事への彼女のせめてもの憧れモードだったかとも、想えて来るのである。

私は鮮やかに思い出す、遠い里山の日々、食事を届けた一夕一々を、である。あの心からの微笑みを、空しき日々、苦難の果て、全身からにじみ出ていた、仏様にも較べうる彼女のあの微笑みを、である。今以ってあの微笑みに叶うような、人を引きつけて止まない笑顔、私はついぞ知らない。あの笑顔には誰も敵（カナ）わない。後年私は男女によらず笑い顔の素敵なお人、つまり笑いという表情・顔相で人を推し量るようになった。今では私は、あの笑顔のように成れるものだろうか、日々彷徨（サマヨ）っているばかりである。



図書館のある風景（その四）

近江 哲史

一、口づての情報――

「六人を介せば・・・」

私の所属しているNPO法人は、N市の図書館の一つを指定管理者として受託、管理運営し始めてから三年目に入っている。全体としてはまずまずの状態とは思っているが、ふだん日常のすべてが何もないということではない。突然館内の非常ベルが誤作動して来館者を驚かせたり、ヘンな来館者があってこっち（カウンター職員）が驚いたりということもある。それらはまたいろいろと口伝てに人々の話題に上っていく。あの図書館は前よりよくなったねという噂になれば嬉しいし、その反対のことがあれば困ってしまう。そういうことは当方の認識している「事実」とは関係なく、あらぬ方向に走って行くこともある。

そんなことを思っていると、またある話題を思い出した。すでにご存知の方もあろうが、「六

人を介せば、世界の誰ともつながる」という話である。どんな人でも五十人の知り合い（友だちというまではいかなくとも）はいるだろう。その五十人はさらにそれぞれ五十人の知り合いがいる。この計算で五回繰り返すと、六人目に至ると一五〇億人を超す（私は計算していないが）というから、世界中のあらゆる人は知り合いの知り合いなのである。

（以上についての参考文献：森健『ゲーゲル・アマゾン化する社会』光文社新書、二〇〇六。この一五二ページ以下）

身の回りを見返して一例を探すと、私の在職中の同僚E君（故人）は麻布中学時代の頃、作家安部譲二氏と元総理大臣橋本龍太郎氏と三人仲良し組みだったという。総理大臣ともなれば相当の人々あるいは海外の知人もいようし、著名作家安部氏ならそれこそ各層の人材となじみもあろうから、私はまずこのE君に何かを頼めば、三人か四人ほどの連携で、たちどころに日

本でも海外でも相当な人物にまで伝言くらいできたはずなのである。あるいは、ご近所には「放送局」などとあだなされている有力おばちゃんなどがきつというだろう。こういう人を介すれば、あらゆることがあつという間に伝染伝播することは日常知られている。

かくの如く、人の口は重要な情報伝播のツールである。心しておく必要がある。

二、図書館員の子息たち

この話は本当は今更またここに披露することはないのだが、どうも気になるので書いておく。それは『図書館雑誌』二〇〇〇年三月号の巻末に出た小さな謝罪記事である。当誌の編集委員長が謝っている。そのわけは、その前年十一月号の巻頭に出たエッセイに、「図書館員の子どもは図書館員になるだろうか。私は寡聞にして聞いたことがない。健全ともいえるし、司書に魅力がないともいえるのだが」という一文に対して投書があったという。「図書館員の仕事を否定しているともとれる文章を、しかるべき欄にのせるものか、その責任を問う」と弾劾され、これは配慮が足りなかったと謝っているのである。なるほど昔は国鉄職員の子弟は国鉄に勤めたり、役人の息子は役人を希望した。しかし

図書館職員などはその絶対数がごく少ないのだし、歴史的にも何代も勤められるほどの時代を経過していない今日び、こんなことをなぜ問題にしなければならないのだろうか。

今、図書館司書は学校卒業時たくさんの方が希望していると聞く。なりたくてもポストが得られず、残念がついている人も多い。一方、知名度の高い優秀な図書館長以下も数々おられるではないか。国立国会図書館長といえば大臣格であり、その椅子に座る人も今は長尾眞氏が就任しておられ、氏は京都大学工学部長から京大総長を経て国会図書館長になられた電子工学者である。図書館はこのような時代の最先端の学者を迎えているのであり、この他にも図書館の人材は決して他分野に劣るものではない。昔、職業に貴賤はない、などという言葉が言われたこともあったが、それは「貴賤」を意識する人があったからこそそんな言い方が世に存在したのだった。今誰もそんなことは言わない。

はばかりながら、私はボランティアの身分ではあるが市立図書館に関係しており、そのNPOの「理事」という名刺をこしらえて、得々としてこの名刺を差し出している。

三、究極の図書館論

究極の図書館論といえばボルヘスの「バベルの図書館」であろう。ホルヘ・ルイス・ボルヘス（一八九九―一九八六）はアルゼンチン生まれの小説家。この人も実は図書館人ともいえる。一九三七年ブエノスアイレス図書館に司書として勤めていたし、一九五五年にはアルゼンチン国立図書館長に就任した。この間作家活動に励み、多くの作品を生み出している。

「バベルの図書館」は『伝奇集』という短編集に収められた短編小説であるが、内容は実に奇妙奇天烈なものである。この日本語訳には篠田一士氏のもの、鼓直氏のものがあるが、いずれの訳文で読んでも、それに従ってこの図書館の内部の図を描こうという試みは誰も成功には至らないだろう。

そして話題は日本の作家平野啓一郎氏がこれのパロディとして「バベルのコンピューター」なるものを書いたので、さらにもしろくなつた。ボルヘスが語った「バベルの図書館」をヒントに、無限の言葉をつむぎ出すコンピューターを描いたのである。

ボルヘスが『バベルの図書館』で行った目から鱗が落ちるような、しかし身も蓋もない指摘は、すべての単語、すべての文章——要するに言語表現可能なものの一切は、各々アルファベットの「あらゆる可能な組み合わせ——そ

の数は極めて膨大であるが無限ではない——」の或る一通り（その部分または全体）に過ぎないという事実である。（「バベルのコンピューター」『滴り落ちる時計たちの波紋』所収、その二七八ページ）

ついでに「バベルの図書館」がどんなものか気になる人もあろうから、もう一度右記の著書から引用してご覧に入れておこう。

「図書館」は、真ん中に「換気孔」が開いた六角形のフロアを上下に不定数積み重ねた構造になっており、各々の階の2辺を除いた4辺の壁には、同じ体裁の5段の書棚が設置されているという。そこに納められている本は32冊で、やはり同じ体裁であり、各々が410ページ、各ページは40行で、1行約80字の黒い活字から成っている。正書法上の記号の数は25個で、ピリオド、コンマ、単語と単語との間の1マス分の空白（これも記号の1つとして数える）、アルファベット22字である。すべて小文字で、アラビア数字は含まれていない。そして、「広大な図書館に同じ本は2冊ない。」これが、非常に重要な前提となっている。（同上書同ページ）

こんな条件なのである。図書館の構造につい

ではもっと描き込まれている。平野の「バベルのコンピューター」もボルヘスの「バベルの図書館」も、おもしろいといえばなかなかおもしろいし、退屈といえば退屈な話だ。文芸誌『すばる』二〇〇四年九月号に平野が「ボルヘスと『現在』」という一文を書き、江島健太郎氏が同年九月号の『新潮』に「白紙のコンピューター文学」と題して平野のこの一文について論評した。しかし難しい論調に見えるこの議論が何かに有効なものか、私には理解し難い。俳句や短歌のような僅か十七字、三十一字のものでさえ、字の組み合わせはたいへんな数になり、結局は普通に作られる歌や句に新規性が認められるのである。

要するに、あらゆる文章は、言葉、否その前の文字の順列・組み合わせによって成り立っている。また図書館はそんな本を無数に収容しているというのである。しかしいずれも実際には無駄な話で、共に現実離れた話題にすぎない。

余談ながら一言。私は平野啓一郎氏（一九七五〜）のこの言は別として、氏の作品を評価している。彼が将来ノーベル文学賞を得ることはあり得ると思っている。今考えるその根拠は、①デビューがもともと早く、鮮烈であった。（若くしてデビューする人は政財界であれ、文芸・芸術・芸能界であれ、その才能が卓越している

ことの証明であり、若いデビューを果たした人ほど高い地位に進み、またその活動寿命も長いことが各界において見られている。）②多作であり、多様な作品が書ける。またそれぞれの水準が高い。これまでの僅か十年ほどの活動期間のうちに、第一期・初期三部作『日蝕』『一月物語』『葬送』、第二期『高瀬川』『滴り落ちる時計たちの波紋』『顔のない裸体たち』『あなたが、いなかった、あなた』、第三期『決壊』『ドーン』などと時代区分さえできる作品の変遷があつて、それぞれ特徴的な文学的発展を遂げている。③外国語への翻訳が多数出ている。海外での知名度も高い。これは必須の条件である。④国際活動が目立つ。海外に住んだり、文化使節など国際交流も行なっている。これも知名度を高める条件である。⑤私のカン。あの大江健三郎氏でさえ（といういい方は彼の信奉者を怒らせるだろうが）ノーベル賞を得たのだから平野が貰っても悪くはないと思う。以上は予言的雑談ではありますが。

四、図書館の本を読みつくそう

N市では「公開読書会」というものを行っている。私が常任の司会者みたいなものなのだが、月一回、市立中央図書館の会議室で実行してい

る。二時間の時間を次のように区切る。①三十分は私がその日のテーマにしたがつて若干解説的スピーチをする。例えば前回は「ノンフィクション文芸について」など。②次の三十分はセミプロの人の朗読である。例えば前回は水上勉の小説『停車場有情』からの二編、聞いておもしろい話であつた。③最後の一時間は、参加者の中から銘々が最近読んだ書物について紹介・発表するのである。これは毎回四〜五人が準備をしてくれる。私もこれにはいつも思いもよらぬ本の紹介を受け、そうか、そんな本があつたか、と参加者の読んで発表してくれた話題に感銘を受けることが多い。本来、自分の読む本には偏りがある。しかし他人の読んだ本の話を知くと、それも是非読まなければと思うことがたびたびである。

前回ですでに三十回を経たが、毎回二十人前後が参加している。「公開」という立場でメンバーを固定せず、読む本を一冊に定めず、こんなフリーな読書会は他に例は少ないのではないだろうか。読書会といえ、一冊の本を固定メンバーで深読みするのが多い例だと思ふし、それはそれでまことに意義深い、わが方のやり方はいろいろな本をどんどん読み合おうというのが趣旨で、こんな方法を取っているのである。

しかしそうは言っても、年間の大テーマは

作っている。第1年は「図書館の使い方・読書の楽しみ方」であった。第2年目は「図書館の本を読みつくそう」ということで日本十進分類法の各類をひと月ごとにめぐり、要は誰もが図書館のあらゆる分類の本に触れてみようという目論みだったのである。第3年目は「ふたたびの読書入門」としていろいろな読書論を復習した。第4年目すなわち今年は「小説は心の糧」として今年は日本文学をジャンル別に巡っているのである。(来年は日本文学に進むつもりだ。)

このうち第2年目の「図書館の本を読みつくそう」というテーマは、どなたにとっても一応は自分の好き嫌いに関わらず、図書館のあらゆる棚を見ていこうという提唱なのであって、結構参加者の支持を得た話題であった。この件については私はその全容を原稿にまとめているので、近々N社から刊行の予定もある。

図書館の本を読みつくそう、というのは大袈裟な話ととられるかもしれないが、これから無限の時間を眼前にして閉口している定年人にとっては、おもしろい目標であると思える。

五、図書館のない風景

うるさい男が近寄って来た。「キミはいつまでそんな『図書館のある風景』なんぞというエッ

セイもどきのものを書くつもりなのかね」大きなお世話である。「図書館のあるかぎり書くさ。まあ、当分あるだろうからね」「ハハハハ、キミは時代というものの認識が超甘いね。今や図書館はまもなく瀕死の状況に至ろうかと言っているのに」

彼は昨今の電子出版や電子本が、この世を席巻し来ることを言っているのだろう。なるほどアップルの「iPad」なら、これはパソコンであり動画や音楽の再生機であり、電子書籍端末である。今、六万冊ほどの品揃えがあるとか。アマゾンの方は「Kindle」が五万冊くらい読めます、とか言っているそうだ。(これらは情報によればそれぞれ何十万冊もいけるとかいう。)

確かに、図書館に行ったら電子書籍端末が並んでいて、本はさっぱりないという状況であれば、誰も図書館に喜んで行こうという気はしないだろう。家にいるのと一緒だ。しかし、私の意見によれば、本には二種類ある。①調べ尋ねる本 ②読み楽しむ本 これである。文芸書哲学書などが②であり、これ以外のハウツーものなどは①である。①の本はいくらでもデジタル化すればよい。検索また検索で、調べていくがよい。しかし②の方は、紙の本絶対である。これは寝転んで読む、トイレの中で読む、もちろん図書館で読むのがお勧めである。実はこう

いう本ばかり揃えておくのは図書館でなく「読書館」とする。そこでは居住性を重視する。これからの図書館はこういうものだけになるのである。アイツが意地悪そうに言ったのは①向きの本を収容すべきもので、確かにこの分野では従来型の図書館はなくなるであろう。だから「図書館のない風景」は、これを想定するならば、あり得る話だ。

書誌作りは愚直な仕事？

太田 泰弘

3月4日付け読売新聞の「編集手帳」欄に「発車時刻まで余裕をもって駅に行く人と、ぎりぎりまで遅刻する人を比べると、乗り遅れる側に利口な人が多い」という内田百閒の文が引用されていました。「利口な人」とは、前日に開催された参議院予算委員会に遅刻した3名の閣僚を指すのはいうまでもありません。その反対側にいるのは「愚直な人」なのでしょう。世の中は多数の愚直な人と少数の利口な人によって構成されており、利口な人は愚直な人の成果を踏み台にして行動していると思えてなりません。

私たちの創造的な知的活動は、これまでに得られた知識をもとにしておこなわれています。この知識は自分で生み出したものもありましようが、大部分は周囲の人から聞いたり、文献から探し出したものです。この作業を怠れば、創造的な成果だと思っていたことが実はすでにわかっていただけだったという無駄を産む

ばかりでなく、新規性を尊重する学術領域では、知らなかったではすまされない致命的な痛手を受けます。この痛手は論文の発表者だけが負うものではありません。論文の審査員も審査の權威の軽重を問われますし、論文発表の場所を提供した学術団体も權威を落としかねません。このような不始末を未然に防ぐ手段の一つが「書誌」です。

今でこそ、まともな研究者には常識となつてゐる「書誌」ですが、「日本索引家協会」が発足した1977年頃には、知名度はさほど高くはなかったようです。この協会の機関誌であった「書誌索引展望」の初期の号から、いくつかの文章をとりあげてみましょう。

「世間では、重要な言葉でありながら、割合あいまいな意味のままで人々の間で通用しているものがある。書誌もその一つであり、どちらかというと、一部の人々の間にしか正しく理解されていない言葉かもしれない。」（丸山昭二

郎、書誌とは、書誌索引展望、1、211-223（1977）」

「丸山氏があいまいといわれているように、書誌という言葉ぐらいいわかりにくいものはない。書誌という言葉を使用して異なった研究分野をもつ書誌学があるからである。また、文献、リスト、書目、目録のようにいろいろな言葉で刊行されている多くの図書（書誌）を目にするのだが、カード式の形態をもつ図書館の目録も広義には書誌ともいわれるし、論文末尾に掲載される参考文献でさえ、その量はともかく書誌と表示されたりする。書誌とひとくちにいつても、以上のようにいろいろに表現され、わかりにくくしているかに思える。」（浅賀律夫、わが国における書誌の現状、書誌索引展望、1、224-229（1977））」

書誌は研究者にとって大切な道具とされながらも、著名な書誌学者であった天野敬太郎氏をして「書誌の作成は、論文と違って、学者の業績としては認められない。下手な論文よりも、いい書誌の作成のほうが、どれだけ学会に役立つかわからないのですがね」と嘆かせました（「岩猿敏生、天野敬太郎氏、書誌索引展望、1、253-258（1977）」）。書誌作成の先輩格である欧米でも同じような事情にあったようで、「書誌入門」の著者であるハーモン氏は「専門職の威信という観点では、書

誌作成者は下位に近い序列に位置づけられ、その仕事の内容について世間の理解が不足している」と訴えたほどでした[R. B. Harmon、長沢雅男（監訳）、『書誌入門』、23頁、日外アソシエーツ、1984]

このような事情にもかかわらず、世間では神がかり的と思われぬほど途方もない労作をものにした学者は少なくありませんでした。その利用者は、専門家であればあるほど、労作に払った努力を十分に理解しているのですが、その業績を公開の場で評価することは少なかつたようです。人文系の古典にかかわった研究者であれば、『古事類苑』や『群書索引』に一度ならずお世話になったでしょうが、これらの編集者の苦勞に思いをはせる人はどれだけいたでしょうか。狭い学術領域だけを考えても、論文の数は加速度的に増加して、個人の記憶だけに頼ることはできず、十分な訓練を受けた専門家が作成した書誌に依存せざるをえませんでした。学際領域の研究活動が活発になったことも書誌への関心を高めました。が、制作者個人への評価はいかかわらず低く、「日本索引家協会」は結成20年であえなく解散となりました。頭の良い人々は、このような地道な仕事を受け継ぐことに関心をもちなかつたからでしょうか。

そうはいっても、「書誌」の必要性は日毎に高まりましたから、個人の努力は組織の努力に

置き換えられ、国立国会図書館をはじめとする公共図書館、そして有力な専門図書館も書誌作成にはげみました。この分野の先進国であるアメリカでは、Wilson, Bowkerなどの書誌専門出版社が高い評価を受けていましたので、日本でも民間企業でできないはずはないと動き出した企業家がいきました。日外アソシエーツの創始者であり、現在も社長として活躍されている大高利夫氏です。1950年代、私は食品会社で、彼は電機会社でドキュメンテーションの仕事に関わっていました。二人とも勤務先は川崎でしたから、1961年に設立された京浜地区資料室運営研究会（現在は神奈川県資料室研究会）の会合を通じて彼との交流が始まりました。彼が今でいう脱サラでこの事業を始めたときに、「この仕事は3年しかもたない」と批判したことを今でも忘れていません。しかし、この迷言にかかわらず、彼の仕事は今も発展を続けています。何が彼の仕事をささえてきたのか、早い機会にゆつくりと話をききたいと思っています。

私自身、いまでも書誌や用語集の作成を続けています。情報活動のなかでめざましい発展をとげているSEやITを横目でみながらも、愚直だからこそ続いているのだという確信をもつようになりました。

俳句ことはじめ

門倉 百合子

た。

工事中無人の書庫も九月かな

歳時記に親しんでみると、自然の捕らえ方がこれまでとまったく異なってきたことに気がつきました。なにより季節のうつろいや動植物の様子に敏感になりました。昔母と旅行した際、俳句に親しんでいた母は歩きながらたたくさんの事物に心を寄せていたのをうらやましく感じたのですが、その母の感覚がすこしわかってきたようで嬉しくなりました。

また毎週日曜の朝八時に「NHK俳句」という番組があることを知り、テキストを買って欠かさず見るようになりました。毎週替わる四人の選者（当時は長谷川權、安原葉、正木ゆう子、宮坂静生）はそれぞれ個性がはつきりしていて、俳句のポイントがわかりやすく紹介され、ゲストの話もいつも興味深く、日曜の楽しみめの時間になりました。

最初はブログ

平成十九年初夏、仕事で毎日ブログを発信することになりました。一般公開に先立ち組織内のみの試行版を作成し、冒頭に毎日「今日はいい天気です」というような、その日の時候の挨拶をつけていました。そんな八月のある日、改装工事中の職場の外に一日立っている警備員さんが目に留まり、ふと「せみ時雨木陰に立ちぬ警備員」とブログに書いてみたのです。それ以来同僚におだてられ、毎日ブログの挨拶にこの俳句もどきをつけるようになりました。

月蝕も家路もぬらす秋の雨

俳句の心得などまったくなかったので、勝手に五七五に当てはめていたのですが、さすがに何も知らないと先へ進めないことに気づき、まずはインターネットで「俳句」を検索。いろいろ

歳時記

さて季語を知るには歳時記が必要ですので、これも持ち運びできる小さいのを一冊購入し、翌日から毎朝の通勤電車でその時期の歳時記を読み始めました。そして職場に着くまでに今日の一句を作成、ブログにのせる毎日が続きまし

試行錯誤の日々

その年の十一月にベトナムへ行く機会があり、歳時記も一応持参したのですが、やはり風土が違うとなかなか思うようには行きません。

(この時の旅行記はフォーラム5号に載せました。) そんな時に本屋でふと見つけたのが、高橋睦郎『百人一句』(中公新書、一九九九)という本でした。古代から現代にいたる代表的な俳人とその句をとりあげ、解説が書かれています。じっくり読んでみるとなるほどこの国の俳句という文芸はこのように変遷してきたのかと、おぼろげながらわかってきました。

そうこうしているうちに、翌平成二十年二月にブログが一般公開されました。私の一句も最初はつけてみたのですが、さすがに世間の目にさらすには恥ずかしすぎ、早々に取り下げることにしました。毎日書く対象がなくなると、とたんに創作意欲もかげりをみせ、なかなか詠むことができません。それでも「NHK俳句」は面白いので見続けていました。四月になると「俳句ビギナーズ」というコーナーができ、まず「詠むより読め」とのことで、自分で詠むより先人の句をたくさん読むのが大事、と教わりました。

その年六月にベトナムを再訪した折、行きの飛行機が海南島にかかったのがわかり、「夏の海鑑真の海越えゆけり」と詠んでみました。直前に井上靖の『天平の甕』を再読したばかりだったのです。知り合いに送ったところ、「鑑真の海を一気に朱夏の街 甲斐杳太」という句があることを教えてくれました。なるほど私のとは

比べるべくも無く力のある俳句でした。先人の句は実に参考になります。

句会へ

さすがに一人で詠んでいるだけでは限界を感じ、大先輩の山内明子さんに相談した所、早速句会に誘ってくださいました。そして平成二十一年四月より、いよいよ句会デビュー。その月の兼題があらかじめ送られてくるので、それを入れた句を含めて三句を幹事の方へ事前に電子メールで送ります。句会当日は投句者全員の句が無記名でランダムに印刷された紙が配られ、各人が三句ずつ選びます。その後票の多かった句から選評が続く、なんとか最初の句会を終える事が出来ました。なお、句会に先立ち俳号を自分で決めるといわれ、あれこれ考えた挙句に、「百子」にしました。「ひゃっこ」と読みます。

昨年の「ふぉーらむ6号」には、山内師匠にないしよで詠んだ句をいれた文章を投稿したのですが、あとから師匠に講評いただくことができました。見よう見まねの俳句ですが、句会参加も一年とすこしたち、その中で少しは票が入った句をいくつか載せさせていただき筆を置

きます。

平成二十一〜二十二年の句より

百子

一面の青田メコンの水流る

一家して売る羽子板のめでたしや

気位は飼い主に似て炬燵猫

泊まりたし浜の真砂女の避寒宿

黄砂来る父戦ひし大地より

能楽に魅せられて

京藤 松子

五年前、アメリカン・センターを定年退職すると同時に始めた「謡と仕舞」の稽古は、すっかり私を能楽の虜にさせてしまった。何がそんなに魅力的なのか。確かに師匠に付いて習う謡と仕舞の実技は楽しい。だが六十の手習いの身では、発声法や舞の所作がなかなか体得できず自己嫌悪に陥ることもしばしば。それでも能楽に嵌まって抜けられない理由は、まず謡曲の詞章の美しさと物語の面白さにある。

謡曲は能のテキスト（能の台本）である。現在演能されている曲目はおよそ250曲といわれるが、その大半は、能楽（当時は猿楽）の始祖観阿弥・世阿弥父子、世阿弥の子息の観世元雅、甥の音阿弥、女婿の金春禅竹などによって書かれ、約600年前の室町時代に完成している作品である。物語はしたがって、当時流通していた説話や伝説を集めた『今昔物語』、武家貴族たちの教養・知識として知られていた『源氏物語』『伊勢物語』『平家物語』『古今和歌集』

などから題材を得たものが多い。在原業平、小野小町、源義経、曾我兄弟が最も多く能に登場する人物だといわれるが、能作者たちはこれらの登場人物を必ずしも主役（シテ）にするのではなく、例えば業平がシテとして登場するのは「雲林院」だけで、「井筒」では紀有常の娘に

業平との恋物語を幽玄に語らせ、「杜若」では三河国八橋の杜若の精が業平と二条后高子の恋と業平の東下りを語るといった風。義経も「屋島」ではシテであるがあとは子方（ツレ）として登場するだけで、「安宅」では弁慶が、「正尊」では土佐坊正尊が、「摂待」では佐藤繼信・忠信の母老尼がシテとして、義経伝説をドラマティックにまた情緒的に運ぶように脚色している。

典拠作品では『平家物語』が一番多く37曲あるという。中でも平家の公達や武将を扱った修羅物の「敦盛」「実盛」「忠度」「清経」「頼政」「鶴」などは、生前の雲上人としての優雅な生

活への妄執と修羅に落ちた瞋恚の苦しみを、作者（多くは世阿弥）の思い入れを込めて追真的にまた心情的に描かれているので読み手（謡い手）の心を打つ。小野小町を扱った曲目は5つあるが、観阿弥作の「卒塔婆小町」は、かつて世の男性を魅了した才色兼備の小町が今や老醜を漂わせて物乞いとなり、卒塔婆に腰掛けて休んでいるところを通りかかった旅の高僧に注意され、それに次々と反論を畳み掛けていく禅問答が面白い。理解するにはちょっと難しい点もあるが、場面の設定、問答の巧みさ、教義内容の高尚さが知的に刺激される。仏法・禅思想は多くの曲目の基底に流れている。

謡曲にはまた、和歌や古詩・唐詩が多く引用されているうえ、文章には縁語・掛詞・枕詞・序詞といった修辭技法が頻繁に駆使されている。登場人物の台詞はすべて室町時代の候文。武士の上下関係ではもちろん、親子間や夫婦間にも敬語が使われていて実に品の良い美しい日本語だ。文体は七五調・十二字一行で書かれているためリズムカルで詩的である。謡ではこの七五調の句を八拍子のリズムを基本として謡う。曲目の種類（修羅能や幽玄能）によって急調子（中ノリ）や緩調子（大ノリ）に謡う箇所があり、文字通り快適なリズムにのって心地よい。能楽堂で眠ってしまうのは多分このせいもあるろう。

さて、謡曲を知る（習う）ことによって得る効力を記したものに「謡曲十五徳」というものがある。細川幽斎（戦国時代の武将・歌人）によるものという。

1. 不行而知名所 行かずして名所を知る
2. 不思而登座上 思わずして座上に登る
3. 不馴而近武芸 馴れずして武芸に近づく
4. 在旅而得知音 旅に在りて知音を得る
5. 不軍而識戰場 戦わずして戦場を知る
6. 不習而識歌道 習わずして歌道を識る
7. 不望而交高位 望まずして高位と交る
8. 不詠而望花月 詠めずして花月を望む
9. 不老而知古事 老いずして古事を知る
10. 無友而慰閑居 友なくして閑居を慰む
11. 不触而知仏道 触れずして仏道を知る
12. 不恋而思美人 恋せずして美人を思う
13. 不祈而得神徳 祈らずして神徳を得る
14. 無藥而散鬱氣 薬なくして鬱気を散ず
15. 不嚴而嗜形美 厳ならずして形美を嗜む

フムフム、大方は賛成できるが、これらは余りにも消極的。時代の違いもあるが、私は〇〇せずして〃を幾つかを除いてすべて〃〇〇し〃と置換えたい。私なりに感じている謡曲の〃徳〃をあげると、

1. 古典を読み日本文学の知識が深まる

能を知るために典拠作品の『平家物語』『源氏物語』『伊勢物語』『今昔物語』から始って『古今和歌集』『新古今和歌集』『紫式部日記』『和泉式部日記』など次々と読みたくなりアマゾンへの注文と図書館通いが続く。

2. 日本の歴史と地理を学ぶ

これまで点でしかなかった知識が『大鏡』『今鏡』『増鏡』『吾妻鏡』と読んでいくうちに線で結ばれ、歴史上の人物とその時代背景についての知識が増し、さらに深く知りたくなる。

3. 名所旧跡・寺院を目的をもって訪れる

能の物語に関連する場所や寺院は多い。西国三十三ヶ所の古刹（清水寺、六波羅蜜寺、長谷寺、三井寺、石山寺、成相寺など）は特にそうである。2008年と2009年は「西国三十三所」巡礼の中興の祖・花山法皇の没後1000年を記念した御開帳が始まったので、友人と新幹線を10回以上往復して訪ねてきた。ついでに「三山」の大和三山に登り、「当麻」の当麻寺で中将姫伝説の蓮糸曼荼羅を拝み、宇治平等院では「頼政」自害の跡、扇の芝で彼の無念に思いをはせた。謡跡は九州から東北まで日本津々浦々にある。目的をもった謡跡巡りは

楽しい。

4. 美しい日本語に出会う

謡曲の文体が候文の七五調・十二字一行で詩的に書かれている他に描写が実に美しい。例えば「巴」から、木曾義仲が粟津ヶ原で自害したあと形見の小袖を木曾に届けるため別れを告げる部分

立ち返り 我が君を見立てまつれば傷はしやはや御自害候ひてこの松が根に 伏し給ひ御枕のほどに御小袖 肌の守を置き給ふを巴泣く泣く 賜はりて死骸に御暇申しつつ 行けども悲しや行きやらぬ君の 名残を如何にせん

（謡本のまま）

心情の描写も心を打つが風景の描写も目に映るように美しい。

5. 声や足腰を鍛えるので健康になる

謡曲は腹の丹田に力をいれて背骨を伸ばし大声で謡う。発声法は難しいが情感を込めて謡うと快適だ。仕舞は腰から脚の内側に伸びる大腰筋を活用して舞う。足腰の筋肉を鍛えなければならぬ。そのために週三回はジムへ行き、月一度は山歩きに出かける。

6. 喧騒な世を離れ凜とした世界に浸る

謡曲を謡うのもいいが、何といっても能楽堂で能を観るのが一番。『年来稽古条々』（世阿弥の「風姿花伝」）の厳しい訓練を日々重ねているプロの能楽師が演じる能ほど感動させるものはない。能面、能装束、囃子（笛、小鼓、大鼓、太鼓）、地謡、無駄のない最小限の演技、これらで能のドラマが見事に表現され観客を惹きつける。世阿弥は演目による『位』の取り方を伝書で厳しく書いているが、能役者はその『位』を演技に表現しているのである。能は凜とした演劇である。

謡曲の『徳』はまだまだ沢山ある。紙面の都合もあるので止めるが、とにかくこんな素晴らしい世界に嵌まり込むともう抜け出せない。知れば知るほど学びたいことがいっぱいある奥の深い分野である。最近は大学で世阿弥の能楽論や能楽資料研究の授業を受けている。一生かけてこの分野にどっぷり係わっていききたいと思っている。



占領軍 いまはむかし

今 まど子

最近、気がついたことだが、私の中学・高校生時代の6年間は、日本占領期とぴったり一致しているのである。

私が疎開して片瀬にある乃木高等女学校に入学したのは、昭和20(1945)年4月のことだ。その年の8月15日に大東亜戦争が日本の敗北に終わって、占領軍が大挙してやってきた。疎開をしていた逗子の町にもジープが走り回った。翌年4月、学制が変り新制中学校になったので、入学し直した。乃木高等女学校は、何と湘南白百合学園中学校と名称も変り、校門にあった乃木大将のレリーフは聖母マリアの像に変身していた。女学生は中学生になったのである。

1952年4月、慶應義塾大学の1年生になった。その月の28日占領が終結し、占領軍は居なくなった。たとえ太いお下げをぶらさげた女子学生であっても、逗子から鎌倉に引っ越して住んでいたにしても、占領時代を生きていたことに変りはない。

占領軍と図書館との関わりを調べ始めて8年になんなんとしているが、占領関係の本を読んでいると、あの時代が蘇ってくる。8月30日にコーンパイプを片手に厚木飛行場にマッカーサー元帥がマニラから飛来した。どの本にもそう書いてあるが、ある時「あれッ」と、疑問が湧いた。

「マッカーサーはマニラから来たの？」

「あの頃の飛行機ではマニラから一足飛びに日本に来られなかったんじゃないかしら？」

あれこれ調べたが分からない。そんな時、マッカーサーのお医者さんが書いた本に出会った。お医者さんはマッカーサーと四六時中一緒にいて、元帥の健康管理に当たっていた。この人なら知っているかもしれない、と頁を読み進んでいくと、

あった！ あった！ やつぱりマッカーサーは沖繩で一泊していたのだ。その夜は沖繩米軍の司令官や次から次と人が来て、戦勝国の将軍

として敗戦国に乗り込む将軍にお祝いの挨拶が途切れることがなかったそうだ。

そして次の日、8月15日午後2時にマッカーサー元帥は沖繩から厚木基地に降り立ったのであった。

1945年ではピンと来ない。昭和20年ではなくては。昭和20年になると毎夜B29の大編隊が日本の都市を襲った。5月25日の東京山の手の大空襲で渋谷のわが家も灰燼に帰した。その頃、硫黄島が玉碎し、グアム島、サイパン島などを飛行機の基地として、ここからB29を発着させて日本を襲うためだったのだ。その程度の距離でなくては、毎夜日本を空襲することはできなかつた。毎夜警戒警報が空襲警報に変わって、短いサイレンが繰り返し繰り返し夜空に鳴り響くと、飛び起きて赤ん坊だった妹をオンプして裏山の防空壕へ逃げ込んだ。その経験が私にあれッ！マニラから一ツ飛びで来た筈はないと思わせたのだろう。

1946年3月にアメリカから日本の教育改革のためにマッカーサーが教育使節団を招聘したことはご存知であろう。27人のアメリカでも指折りの教育分野の専門家が3月5日と7日の2回に分けて飛行機で来日した。途中ハワイとグアムで会議を持ったというが、当時の飛行機がアメリカからノン・ストップで日本に来られなかつたので、給油のためのストップが会議に

なった。教育の専門分野でいかに著名な人々であつても民間人である。しかし、教育改革は日本にとって緊急を要する事なので、27人のメンバーは飛行機でやつて来た。そのためにこの27人の民間人全員に准将の位を与えて、飛行機に乗せたと言う。その手続きも大変なものだったという記事を読んだ覚えがある。

あの頃、飛行機で移動できたのは占領軍の軍人でも将官以上でなければならなかった。GHQの高官でも、GHQが日本の復興のためにアメリカから招聘した賓客でも船で往復していた。GHQの将兵の休暇は40日とか、60日、90日が単位で長かった。船便で往復するのであるから、30日位の短い休暇では、アメリカへの往復はできない。短い休暇しか取れない場合は、日本国内を旅行したり、アジアの国へ観光に行ったりするのが関の山だった。

関西方面に進駐した第六軍の司令官、クルーガー將軍も任期が来て46年1月に帰国するときには船便であり、クルーガー將軍の後を引き継ぎ、関西方面も含めて日本全土を管轄したアイケルバーガー中將も48年に帰国するときは同様に船便であつた。「少年の町」で知られているカトリックのフラナガン神父も日本の孤児の問題でGHQに招聘され、勧告書を提出し、それがきっかけとなり、日本に児童福祉の種を蒔き、赤い羽根のアイディアを授けた神父でさえ、横須賀

からラ・サール号という船で帰国していたのである。

今、船旅は「クルージング」といわれ、地中海クルージングとか飛鳥に乗って海の旅などと優雅な旅のイメージである。日本国内でも飛行機で異動するのが当たり前になっているが、民間航空が始まったのは実は、19xx年のことであり、意外に空の旅の歴史は浅いのである。

エグバーク、『裸のマッカーサー』

記号・解釈・即興

山崎 久道

同じ楽譜から違う音楽が

音楽が好きで、よくCDを聴いたり、演奏会に行ったりする。一つの曲を色々な演奏家で聴き比べることも、興味が尽きない。ベートーヴェンのシンフォニーを、トスカニーニとフルトヴェングラーとワルターの演奏で聴いてみると、その違いに驚く。爽快で切れ味鋭いトスカニーニ、地面を踏みしめながら歩むようなフルトヴェングラー、慈愛に満ちたワルター、といった具合である。ショパンのピアノソナタ第2番（俗に「葬送」と呼ばれている）の演奏を、いずれ劣らぬ名ピアノリストであるホロヴィッツとフランソワとポリーニの演奏で聴き比べてみると、かなり違う。同じ楽譜からよくこんなに違う演奏が出てくるものだと思う。それにしても、似た譜面なのに、そこから聴こえる音楽はまるで違うこともある。だからこそ、音楽は面白いのだとも言える。

そもそも今使われている五線譜というものも、完璧に音楽の内容を記録できるものではない。あるレベルで音楽の内容を一般化、標準化して記録したものであり、楽譜に書かれない作曲者の感覚や思いは、沢山あるのであろう。その意味で、楽譜は「記号」なのである。

記号の持つ性質

記号というものは解釈されて初めて意味を持つ。その解釈は、ある範囲においてであるが、実は多様なものである。楽譜に限らず、文字や言語も記号である。文字や言語という記号も、さまざまな解釈が可能だ。特に一般の文字は、その解釈の幅が「数字」などより、はるかに大きい。これに対して、数字は記号と意味との対応が絶対的である。あるいは、標準化されている。3は2より大きく4より小さいのは、だれでも

いつでも同じである。人によって変わることもなく、場合によって変わることもない。つまり、解釈の余地がほとんどない。もちろん、そのことは、数字や数学の欠点ではなく、そうした性格を持っているということだ。

ところが、言葉とその持つ意味との対応は、それほど絶対的ではない。それは曖昧だから良くない、などという人がいる。これは、数字のような記号が最高だと考える観点からの発想だ。しかし、言語は曖昧さをはらみながら、これまで人間世界のもっとも有力なコミュニケーション手段として機能してきた。

会話と解釈

誰かが、「夏って暑くて嫌ですね」と言ったとする。聞いた人は、「夏というのは、いつごろのことかな、まあ六月から八月くらいまでかな、いや九月も暑いから、梅雨明けから九月中旬くらいかな」「暑いというのは、何度以上の気温のことを言うのかな、摂氏25度以上かな、30度以上かな、いや夏は湿度も高いから湿度何パーセント以上で・・・」「嫌だと言うのは、もうまったく否定したいということなのか、それともあまり歓迎しない、という程度のことなのか」というようなことを一瞬のうちに考える。

全文検索と件名

これが、つまり、かぎカッコに入れたものが、言語という記号の解釈なのである。情報の受け手は、誰でも、こうした解釈を、瞬時に行っているのである。

これを、発言者が「季節のうちで梅雨明けから九月二十日くらいまでの、とくにその日の最高気温が摂氏28度を超えるような日について、私は、その身体に与える感覚を、精神面で我慢しにくく感じて、拒絶したい気分になります」などと言ったら、もう会話にはならない。こうした不完全とも思われる記号で、私たちはコミュニケーションをしてきたのである。記号の不完全性を、受け手の解釈や想像力で補ってきたのだ。これは、人間のすばらしい能力である。

もうひとつ重要なことは、解釈というのは、上述の例でも分かるように極めて個人的、主観的なものであるということだ。通常、ある記号に対して多くの人が賛同する解釈というものがある。標準となる。それは、しかしあくまでも軸になる部分を示しているだけで、数字のように記号と意味が厳密な一対一対応をしているわけではない。むしろさまざまなニュアンスが残るところが、人生そのもののようでもある。

このことから察するに、文字列や文字や語の利用パターンが似ているからと言って同じような意味の文献であるということができるのか、という思いに駆られる。最近の検索エンジンによる検索は、文字や言語という記号をあたかも数字と同じような絶対性をもつものとみなして、無理矢理処理している節がある。文字や語にさまざまな意味やニュアンスがあることを意図的に無視し、単純化することと引き換えに、効率を上げているつもりなのであろう。

その対極に、図書館が使用してきた「件名索引」というものがある。これは、ある文献（これは、記号の集まりである）に対してその標準的解釈を示したものである。それにより、同じような内容を表現した複数の文献を、同一の件名のもとに集めて、配架や検索に便利のように整理することができる。件名索引というのは、日常生活における人間の認識や理解といった営為をベースに置いて開発された、極めて「人間的な」システムであると見ることできよう。

即興性ということ

一方、記号の解釈を当意即妙に行うところか

ら即興が生まれる。この即興ということも衰退している。バッハなどのバロック音楽では通奏低音というものがあつた。コードネームのような数字とバスの低音しか示されていない。これをもとにチェンバロ奏者が即興的に和声を付け加してソロであるフルートやバイオリンの旋律線を指示する。また、協奏曲には、カデンツァという部分が付いていて、主に第1楽章の終止部のある個所で伴奏のオーケストラが全く休止して、ピアノやバイオリンなどの独奏者がソロで自由に自分の技を披露する部分がある。かつては、ソリストが自分で即興的に演奏したものであつたらしい。しかし、いつの頃からか、誰か他の人がカデンツァとして作曲したものを、その楽譜を見てその通りに弾くようになってしまった。たとえば、モーツァルトの二短調ピアノ協奏曲については、大半のピアノリストがベートーヴェンの作曲したカデンツァをそのまま弾いている。

これでは、即興でも何でもなし。「即興もどき」である。ソリストの個性の差による面白さも半減する。どうも、楽譜通りに正確に弾くことが重要なのだという主張が支配的になっている気がする。それとも、クラシックの演奏家に即興演奏の能力が不足しているのかもしれない。ジャズのインプロビゼーションのほうがこの点では優っている。

国会の論戦が低調である。代表質問では、事前の提出資料が不備だと与党が文句を言い、討論の真剣勝負と思われる予算委員会の日数は、極限まで減らされているように見える。大学では、授業時の質問が激減し、講演会のあとで講師を囲んで人垣ができるものの、講演会の質疑応答で質問する人は少ない。クラシック音楽の世界でも、即興演奏は減多に聴くことができなくなっている。

即興の楽しみ

最後に即興についての、ごくごく私的な思い出を述べる。私の学生時代、音楽好きの三人がグリニッジ・ヴィレッジならぬ東京は六本木に程近い某所に会合して、即興演奏し、それを録音したことがあった。オルガンの研究に専心しフランス近代音楽にも造詣の深いO君がプロックフレートを、ルーセル・ヒンデミット・メシアンなどに心酔するT君はフルート、ヴォア・ユメーヌ（＝人声）等を、バロックから近代・現代までオール・ラウンド・プレーヤーを自称（詐称？）する私はピアノを担当し、三楽章形式のソナタらしきものにまとめ上げた。かくして出来上がった作品の芸術的価値については問題の多いところだが、演奏（すなわち創作）過

程において、感興の赴くままに自由自在に指を鍵盤上に滑らせる快感に、三者間の合奏が産み出す緊迫感が重ね焼きされて今まで味わったことのないユニークな音楽的感動を体験することができた。その後、同様の試みを別のメンバーと行い、前回ほど優れた作品にはならなかったが、楽しかったことに変わりはない。

ところで、この「楽しさ」はいったい何に由来するものなのか？それはとりもなおさず「即興演奏」という行為そのものである。この即興演奏の楽しみは、合奏の楽しみとは明らかにまったく異質のものである。というのも、私が合奏の楽しさを知ったのは比較的最近のことに属するが、ずっと以前から一人でピアノのキイをまさぐりながら旋律の糸を紡ぎ出しては楽しんでた。そのころから、私は即興演奏の諸特徴たる演奏と作曲の同時性の魔力の虜になっていた。どうも、同じことは二度とできない、という人生そのもののような感傷と、次に何が起こるか分からないというサスペンスがたまらない魅力になっていたようだ。

人間にとって、生起するすべての瞬間が新しく、過去と完全に同じものは、二つとないはずである。その点から見ると、コンピュータによって、すべてがデジタル化され、何度行っても正確に同じことが起きるという世界は、人間味をますます失ってゆくような気がする。失敗する

ことを怖れて、即興性をできるだけ排除すること。つまりは、生身の人間を機械に近づけることをもってよしとなしている。そのような非人間的習慣が支配する世界に、私は、だんだん魅力を感じなくなってきた。

もう一つの書齋

平井 紀子

私の住んでいるマンションには図書館がある。多摩市立図書館の分館の一つで「関戸図書館」と称し、マンション新築の翌年、一九八四年（昭和五九）に開館した。

当時、私は調布市の国領にある一戸建て庭付きの都営住宅に住んでいたが、（特急が止まり、駅から歩いて1分）という新築マンションの広告を見て、すぐ見学に行った。そこは同じ京王線で国領から八王子寄りにある聖蹟桜ヶ丘駅の前にあった。私は南向きの部屋を希望した。北側の玄関からは、多摩川の流れが間近に一望できた。がっしりとした風格のある建物で、相当額したが、私学共済から借金し、すぐにこのマンションに決めて入居した。

図書館があることは入居後しばらくしてから知った。1・2階が店舗で、図書館は2階店舗の奥に併設されている。（図書館があるマンション）という設備条件も、このマンションの（売り）広告の一つであったが、どのくらいの人か

この条件に魅かれて入居したであろうか。後から知ったのだが、「駅前拠点型図書館」（註1）という多摩市の図書館振興計画の一つとして、より広い地域の住民の利用が見込まれて設立された図書館ということであった。

私は大学図書館に勤務していたので、図書には不自由せず、マンションの図書館の存在に、ほとんど関心がなかった。訳もないのだが、その頃は、アンチ公共図書館派で、大学図書館しか知らない偏った図書館感をもっていたのである。とは言え、図書館勤めをしているのに、自分の住んでいる所の、しかもマンションにある図書館を知らないというのも、みっともないことだと思い、買い物ついでに図書館を覗いてみた。入口左の棚に新刊本が展示され、正面には、お知らせ、パンフレット類が置いてあり、少し先に新聞棚と長椅子があり、中老年が新聞を見ている。蔵書数5万冊位であろうか。奥には閲覧室があつて、勉強している学生が見える。

閲覧室の近くの書架にはレファレンス・ブック、基本的な事典類が形式的に並べてあった。小説や旅行ガイドブックが多く、特に目につく資料はなかった。いったん出口を出たが、住人でもあるし、「利用者カード」だけは発行しておいた。

2階の図書館に通うようになったのは、UDC『国際十進分類法』の日本語版翻訳を依頼された頃だから、退職2年後だったと記憶している。「繊維」「衣服」「家具」などの項目を担当した。日常使う事典類は持っているものの、いざ、きちんとした典拠をもとに調べるとなると、やはり図書館を利用しなければならなかった。しかし、ここの図書館のことは頭になく、初めのうちは元勤務先の大学図書館に足を運んでいたが、電車のなかで、ふと、電車に乗らなくても、家にも図書館があるのだと、今更ながら気づき、行くだけは行ってみようと思い直したのである。

専門的な事項調査を除けば、大方は調べられた。なぜ、もっと早く気づき、利用しなかったのであろうと後悔した。ハナから調べものには不向きな図書館と決めつけていたのだ。時間と運賃もかけずに、書齋のように使えるこんな便利な図書館があつたのに、私はすばらしい特権を持っていたのに。

それからはしぜんと2階の我がマンションの図書館へ足を運ぶようになった。家事を済ませ、十時の開館には入り、閲覧室の席番号をカウンターでもらう。一人用のキャレルと大きな机の一般席とがあるが、キャレルはスペースが狭く、資料を見るのには不便で、私は資料が多く置ける一般席の方が好きだ。机には仕切りはなく、紙の席番号が貼り付けてある。一般席の利用者は長居する人は少なく、隣が空席になると、次の人が来るまで広いスペースを使える。まずは入館すぐに行くのが得策である。その点、私はノーマイクで普段着のまま、十時に家を出ればよかった。UDCの資料では、『日本工業製品総覧』（日本工業新聞社出版局）は、よくぞこの図書館に、私が見に来るのをじっと待っていたかのように思え、分厚い重い本を閲覧室に運んで毎日のように利用した。

拙書『装いのアーカイブズ』執筆の際は、ずいぶんお世話になった。専門となるコアの文献は一応手持ちで揃えていたが、歴史・地理・風俗の学術一般書は、この図書館を活用した。オバックで多摩市の各図書館の所蔵を調べることができる。所蔵していれば予約を掛けておく。係員の手を煩わせることなく、ほしい資料を借りることができる。都立中央図書館への依頼もしてくれる。

最近では、地域ネットワーク・サービス「京

王沿線七市相互利用」（註2）があり、相互貸借が可能で、利用者にとって有難い。

レファレンス・ブックは館内閲覧なので、よく揃っている調布市・府中市の中央図書館も利用した。専門分野の特殊な資料を除き、ほとんどが公共図書館を利用して執筆することができた。

自分が抱いていた公共図書館への偏見は、大学図書館という塀のなかで、一握りの図書館しか知らない、井の中の蛙であったことを知らされ、恥ずかしくもあった。

開館当初は5万冊程の小さな図書館であったが、近年では、蔵書も増え、年々サービスの範囲も拡大しているようである。

市民との協働活動に「たま市民文庫」があり、多摩市にゆかりのある方の著作を集めているという。私もお世話になったので、拙書を寄贈したところ、寄贈者には「たま市民文庫リレートーク」の講師としてお話をする機会が与えられるという。

遅きに失したが、私の「もう一つの書斎」は、個人の書斎から地域社会の図書館へと、その扉を開いてくれた。

（註）

1. 駅前という立地の利点を生かし、夜間開館、参考図書の実、集会所の併設など、今までの地域図書館になかった機能を備えた図書館として開館された。

2. 八王子市、府中市、調布市、町田市、日野市、多摩市、稲城市の七市連携で、条件や制限はあるが、相互貸借が可能である。

専門図書館と公共図書館に関わって

松下 美子

専門図書館の27年間と仕分けへのリベンジ

某業界団体が運営する公開制専門図書館に勤務して四半世紀以上、独自分類表、灰色文献、ワンパースンライブラリーと80〜90年代の専門図書館界でそれなりに評価される図書館に成長した。ところがバブル崩壊、少子化社会の到来などで団体を支える会員会社の経営環境が悪化、2003年初春に事務局・図書館とも〆廃止仕分け〆決定された。

以後、蔵書の嫁入り先探しとレイアウト作成、雑誌の送付先変更・中止依頼、引越しの手配などなど、7月末の解散まで怒涛のように時が流れた(※1)。

退職して旅行などで心身リフレッシュするも、仕事探しが難航する。そこで「情報発信でアピールを」との助言により「まち・街・町」(※2)という情報源サイトを作った。

新図書室は週2日の予約制、都心から多摩地

区へと遠くなった上に、図書館で大切な〆人〆については司書も専任職員もいないという状態。それなら街や住まいの情報を求める人に、〆図書館〆という場は無くなっても〆人〆としてこんなことができる、突然仕事を断ち切られた怒り+悔しさ+不完全燃焼感をノウハウ公開というリベンジのつもりで形にしたのだ。

メインは関連専門図書館のリンク集で、特徴は図書館ガイド類の収録館以外に、何らかの形で関連資料を公開している施設を加えている点だ。関連統計へのリンクなど少しずつ拡大してきたが、その後忙しくなりメンテできず、今年ようやく修正版アップにこぎつけた。素人のにわか仕立て故、リストの幅調整など基本的な問題も残るが、今後もメンテナンスを継続してゆक्तつもりだ。

異次元世界の公共図書館へ

放り出されて1年後、縁あって公共図書館立ち上げに関わった。実は自宅付近には気軽に寄れる図書館がなく、公共図書館のヘビーユーザーではなかったが、逆に新鮮な視点で見ることができ、民間図書館での経験を生かせると思ったのだ。土日祝日含めて遅番もありの世界は初めてで色々大変だったが、図書館経験のある司書スタッフの頑張りで何とか軌道に乗った。

公共図書館で働くようになると、専門図書館が遠く感じる。分類〆NDC、年齢も職業も実様に様々な人たちが様々な目的でやって来る、利用者に貸出できることが大前提、など違うことだらけ。存立の根拠からして違うのだから当然なのだが、こちらから見ると、専門図書館は研究者など特別の人が調べ物に行く特別の場所というような距離感があった。

昨年こちらも卒業し、フォーラムのご縁で週1回JLAのお手伝いに通っているが、これは公共図書館での経験あつてのことだ。

専門図書館×公共図書館

今春に専門図書館関係者の勉強会でこれまでのライブラリアン人生について話をする機会をいただいた。その経験を通じて、双方の経験者

ならではの視点で何かできないかと思うようになった。

まずは専門図書館界の現状を把握するべく、かつ仕事探しも兼ねて研究会、勉強会などに顔を出し、久しぶりに地元図書館で本を借りるなどして勉強している。

当面、テーマとして「専門図書館と公共図書館の連携」について考えている。これまで専門図書館と公共図書館との連携はあまり考えられていない。しかし、いかに生き抜くかを必死に模索する専門図書館と、住民の多様化するニーズに応えることが期待される公共図書館にとって、一つの解が連携ではないかと思うのだ。

振り返ると、所属専門図書館では、都立図書館や地元区の類縁機関リストに協力していたし、冊子体目録や協会会報資料室特集号などは都府県、政令指定市などの公共図書館に送付していた。こういう小さいことから始めてはどうだろうかと思い、手始めに連携の第一歩としての「公共図書館での専門図書館の情報提供」を調べている。調査の概要は次の通り。

① 調査目的

専門図書館は、専門性ではなく立地に着目し、地元住民への周知を強化することが新たな利用を発掘する第一歩として有効ではないか。

公共図書館も専門的な相談については専門機

関への照会、紹介を行っているが、さらに進んで区内専門図書館を周知すれば、特に質問がなくともその分野に関心のある住民にとって直接利用の可能性が広がり、踏み込んだサービスになるのではないか。

以上の理由から、一般住民がもつとも接しやすいい形での情報提供について現状調査を行う。

② 調査対象図書館

東京23区の区立図書館、ただし区内に何らかの公開制専門図書館が存在することを前提とする。公開制専門図書館とは、専図協関東地区協議会サイトからのリンク先、「東京ブックナビ」掲載館、都立図書館サイトの「専門図書館一覧」収録館、その他専門的資料を何らかの形で閲覧利用できることが確認できたところとする。

なお専門と公共の連携といえば、先日受賞された神奈川県立川崎図書館のユニークな活動が思い起こされる。本来高いレファレンス機能を持ち地域内図書館をサポートする都道府県立図書館の調査を行うべきかもしれないが、地域との密着度から市町村レベルを、専門図書館の多さから東京23区を対象とする。

③ 調査事項と方法

各区図書館サイトおよび中央館における専門

図書館の周知度を調査する。

ア 図書館サイトにおける区内専門図書館へのリンクについて、直接閲覧で調査。

イ 各区中央館において区内専門図書館の案内類を置いているかについて、直接訪問調査。

ウ 各区中央館において区内専門図書館の案内類を収集しているかについて、直接訪問しレファレンスまたは地域資料デスクでヒアリング調査。

④ 現在までの結果

アについては23区全てを調べた結果、4区で専門図書館へ、それ以外に7区で区関連施設の資料室等へのリンクを設定している。またリンク全体で見ると、区立図書館（分館・地域館）以外は国会図書館、国際子ども図書館へのリンクが多く、大学図書館あるいは都立相互貸借網の同ブロック他区、あるいは都外の近隣市へのリンクなど、区によりかなり差があった。

なお都立図書館サイトではテーマ、住所などから検索できる専門図書館紹介ページがある。

イとウについては都心を中心に10区の中央図書館を訪問済。入口付近のパンフレットコーナー等に都立図書館や東京サーチなどの案内が持ち帰り自由に置いてある区が5区あった。

閲覧用としては、地域資料の書架で区内の施

設案内をクリアファイルで公開している区が2区、その中に専門図書館または施設全体の案内だが図書コーナー等が明記されているものがあった。ただしあくまで来たものを入れるレベルで、どの区も「特定の分野について質問があれば紹介する。区内専門図書館ということで案内など特別に集めてはいない」という回答だった。

なお都立中央図書館では都市・東京コーナーに配布用案内が、健康・医療コーナーに閲覧用のサイトプリントが置かれている。

⑤今後

専門図書館が存在する区立図書館訪問を続ける。2、3追加調査したい事項もあり、それも含め何らかの形でまとめる機会があればと思っている。リンクやパンフの設置がどれほどの効果を生むかは分からないが、まずは双方の負担が少ない部分から始めることが肝心ではないか。

上・下（松下美子、『建築の研究』No.163、164、2004、建築研究振興協会）
参照

※2 まち・街・町のURLは
http://www.geocities.jp/machi_libn45/index.html

※1 閉館の経緯は「6、783日の興亡
ある専門図書館の開館から終焉まで」



夕張の秋を母と行く

水谷 長志

どうも昭和三年か三四年頃、家財道具も不如意のまま、三〇を前にした父と母は、兄と二歳になるかならないかの私を連れて、北海道の夕張から東京へ遁走してきたらしい。

その父が昨年、逝った。

一年ほど母は船橋法典に一人暮らしていたが、この春から私の家族、妻、息子、娘の四人はそれまでの市川・本八幡の借家を引き払い、船橋法典の母の住まいに転がり込んだ。生前の相続とか何とかで、その家は、ずいぶん前から私の名義になっていたが、子どもが日吉のキャンパスに通うには船橋法典は足の便が悪く、二人が都心のキャンパスに進学するこの春までは、とにかく交通の便利の良い本八幡にとどまっていた。

慣れれば二〇分程の通勤時間の追加も、大したことではなくなる。子どもらは千葉から東京を抜けて神奈川の日吉へ行くよりも、港区と新宿のキャンパスの方がかえって通学は短くなっ

たと気にもとめていない。

父は昭和四年、夕張生まれ。私の本籍も今は移したが、学生の頃までは、夕張市鹿ノ谷何丁目かだった。生まれてはばすぐに東京へ出た私には夕張の記憶はない。鹿ノ谷とはすごい所だな、と想像の果てに風景を遠望しようにも何も現れない。母は秋田市内に生まれ、女学校出だったことを、いまでも内心自慢にしている。秋田市内の平野政吉美術館所蔵の藤田嗣治の壁画「秋田の行事」が描かれるのを子どもの目で直に見たと言っている。昭和十二年二月から三月、平野の米蔵で描かれたというから、昭和六年生まれの母は、小学校に上がる頃だろうか。

夕張生まれの父は、スキーとバスケットが上手かったらしい。というより、スキーは生存のための術であつたろう。よくその経緯は聞いたことがないが、昭和二四年、二十歳の頃に一度は新設されたばかりの北海道学芸大学（現北海道教育大学）に入ったが、教師に向いていない

ことが判明したのか、まもなく秋田大学（前身秋田鉱山専門学校）に転んだという。夕張の生まれだから鉱山は身近だったろう。父の父は鉱山労働者のための社宅を建てる土建屋だった。当時の鉱山は、それは羽振りが良く、土建を一手に引き受けていたこの事業家の息子である父は、いわゆる「乳母日傘」（おんばひがさ）だったらしい。

秋田から母をなんと行って口説いたかは知らないが、拉致するように夕張へ戻り事業を継ぐが、そこは乳母日傘の手に余る仕事だった。初めに書いたように結果は東京への遁走だった。

なんのあてもない東京で、飛び込みで始めた生命保険の外交の仕事を続け、壮年期には、契約高日本一の時代を長く続けたことを本人も周りも誇りに感じていた。最期の最期まで現役だった。保険の外交には定年がなかった。個人相手よりも企業保険が主だったが、保険の法律が変わったとかで、晩年は思うように事業が進まないと話すがあつたが、私には理解を越えた領域で、もういいんじゃないかと言おうとも思ったが、現役でいることが元気の素とも見えて、口を噤んでいた。結局それは悪いことではなかった。

昨年の九月、母と私、子ども二人の四人で北海道へ行った。羽田から千歳へ。空港から札幌

へはエアポート快速が走っていた。初めての列車だ。やはり大地と空気が変わった。天気もよい。高原のようだ。空が高い。

レンタカーを借りる。向かうのは日本海に面した石狩市を抜け、北上してたどり着く戸田記念墓地公園。創価学会の創立者の一人、戸田城聖にちなむ広大な墓地公園。父の母と妹の墓がある。ようやく、母には義母、私には祖母にあたる父の母と、父の妹に、父の死を報告することが、できた。戦後、夕張の炭坑では驚くほど速く、広く、創価学会の信心は広まったらしい。父への教化はあまりなかったようだ。

レンタカーをその日の夕方に返して、道庁を見て、すすきののダイニング風居酒屋で夕飯をとり、夜の札幌時計台、ちよūdい良い季候の中、四人で観光した。

翌日はホテルのバイキングの朝食をしっかりと食べる。五年ほど前に胃ガンで胃を全摘した母だが、選べる品目の多い昨晩の居酒屋やこのバイキングの朝食なら合うようだ。

札幌の駅前から一時間四〇分ほどのバスで夕張へ。バスが着いたのは夕張駅前のバス停。夕張駅は北海道旅客鉄道（JR北海道）石勝線の終点の無人駅。駅前にホテルマウントレースイがあり、背後に冷水山が迫る。あの山を父もスキーで下り遊んだのか。石勝線は「せきしようせん」と読み、旧称石狩国・十勝国から採られ

ている。終着が夕張駅で、一つ手前が鹿ノ谷駅。そこがかつての私の本籍地なのか。

夕張に来るのが目的だったが、いざ来てみると行くあてがない。ゆうばりめろん城、石炭の歴史村（石炭博物館）、夕張花畑牧場生キヤラメル工房を見るか、と思うぐらいにしか手がかかりがない。あまり長く歩くことも母には辛いだろう、とともかく来合わせたタクシーに乗る。

六〇代半ばの運転手だった。実は昔々ここに住んでいて、鉱山社宅を建てていた、映画館と郵便局の真ん中あたりに住居を置いていた、と母が語る内に、そこなら分かるからと運転手。

めろん城よりも石炭博物館よりもそこに行きたい。母はどんな当時の記憶を蘇らせ、次々とあの場所、あの建物へ、と告げて、運転手も「ほう、ほう、それならばあそこだね、次ぎ行こう」と小一時間ばかりも走り回る。ある旅館の前では、ここには何度もお金を運ばされた恨みのある旅館……昔の駅はここできなかった。母は語り続ける。あんたはこの家の前でトラックに轢かれて死にぞこなった。赤い小便が出たら死ぬけど、綺麗なのが出て命を拾った、でも歩行障害が出るかもしれないと医者に言われたなど、私の記憶にない私の交通事故の話をくり返し語った。

運転手はここが映画「幸福の黄色いハンカチ」で高倉健が人を殺めた酒場の前の小路だ、あそ

こであの黄色いハンカチが舞ったんだよ、と口々に立ちあつた記憶を語り、その場に車を着けた。私も息子も娘も呆然としながら、見て聞いていたが、悪い気はしない。

昨日から続く北海道の秋の高い空のように気が持がよい。それは、私にしろ二〇歳を越えて今その渦中にいる二人の子どもにしろ、この母と亡くなった父にもまた、当たり前のことだが、青春があつたことを、この夕張の地のその現場で思えたからに違いない。

父の遺骨は、母の起居する和室の仏壇の前で、いまなお、置かれたままにある。



《JSK創立50年・解散記念特集》

一九六〇年代のネットワーク

—情報資料研究会（JSK）を例に—

末吉哲郎

1. はじめに

「ふぉーらむ」誌5号（2008.7）の拙稿「図書館ネットワークの今昔」で一九六〇年代をはじめとする図書館ネットワークを取り上げたが、その中の一つ、情報資料研究会（JSK）についての記述で年代を一九六一―一九七一年と記述した。その後JSKの会員であった井上如氏から「JSKはいつ解散したのか」という問題提起があった。創立については一九六一年（昭和36）であることは、記録に残っているが、正式の解散の期日の記録は無い。一九七一年は「情報資料研究会10年の歩み」の発行の期日（同年11月）であって、この日をもって解散したわけではない。この創立後一〇年間は毎月の月例研究会がきちんと実施され、当時の二〇才代後半から三〇代にかけての若い年齢のメンバーが研究会を中心に喧々譁々の討論を戦わした時代で

あったが、十周年を期に解散したわけではないようである。その後はメンバー各位は管理職になったり、外部の団体の委員職が忙しくなり、毎月定例で集まることは少なくなり、酒席やゴルフ場での活躍が目立つようになって実質の研究会活動は形を変えてしまった。一九八六年小生が大阪の経団連支部に転勤になったときメンバーで送別会をしてもらったり、何人かでゴルフをやったことは小生の日記に記してある。

しかしながら正式の解散式は行っていないのは事実であるので大分時間は経ってしまったが、解散フォーラムをやって正式解散の運びにしたかどうかということで、太田、井上、花房、坂本氏等と相談の上、本年二〇一〇年一月二十二日に日外アソシエーツ会議室で「JSK新年懇談会」の名目で解散フォーラムをメンバー中心に行い「正式」解散、創立五〇年後の解散の運びになった。

当日は太田泰弘氏がフォーラムの座長を務め、出席の各位から近況とJSKについての所感を述べていただいたが、冒頭に小生からJSK設立の趣旨、研究会の推移、会としての外部図書館団体についての働きかけ等について概略の報告を行った。その後、各自から発言があり、最後に太田氏から本日をもって正式に解散する旨の発議があり、全員の同意を得た。

JSK会員（一九七一年当時）は、次のとおりであった。企業、団体、国会図書館などの図書室所属の若手であったが、飯田賢一氏や国分信氏は近年逝去されている（順不同）。

メンバー…

井上（野村総研）、太田（味の素）、河島（機振協）、花房（アジ研）、藤田（ジェットロ）、飯田（新日鉄）、萩（NHK）、国分（開銀）、浜田（慶大）、関（日経連）、内山（労働協）、近藤（国会図）、緒方（外務省）、末吉（経団連）、坂本（機振協）【順不同】

2. JSKの果たした役割

① JSK設立の趣旨

専図協は設立から日も浅いこともあり、専門図書館の若手職員の学習や活動の場が少なかっ

たので、若手の自主的な勉強会として1961（昭和36年）設立された。目的は「産業界における情報資料活動の充実進歩と会員相互の資質向上をはかること」とし、主題探索方法やレファレンスサービスの研究、外国の専門図書館事情の考察などを事業項目にあげている。

会員は専図協加盟機関の役職者でない若手職員で各機関1名、特定の学校出身に偏らないなどとした。

② 研究会

研究会は毎月一回、会場は会員持ち回り、報告書は毎回交代、幹事も毎年交替を原則とした。報告内容は業務の実態報告、研究調査報告、理論研究、海外事情報告など多岐にわたった。もちろん専図協や国の各機関や経済団体に對する要望なども報告に関連して討議された。1961年から1971年に及ぶ報告テーマは「情報資料研究会10年の歩み」収録の記録やニューズレターに残されている。

③ 外部発表

研究会での発表の他、会員の外部発表の論文・講演などが「会員の知的活動」として10年の歩みに記録されている。専図協をはじめドクメンテーション協会、JICST、日図協など図書館関係の機関誌をはじめ学会発表などが網羅さ

れている。また図書館以外の一般出版社、日経、朝日、ダイヤモンド、東洋経済、第一法規、日外アソシエーツなどからの出版物も多く見られる。当初からの会員11名の10年間のエントリー総数は240点で一人平均22点であるが、年齢が20才代後半から30代前半と若い頃のアピールとしては格段に多い方かもしれない。研究会でお互いに刺激を得た結果でもあるう。

④ 各種団体への参画

専図協や情報資料関係団体にJSKとして、あるいはメンバーが個別に働きかけて実現したプロジェクトには次のようなものがある。

○ 専門図書館協議会 プロジェクトへの参加

ビジネスドキュメンテーション研究集会

JSKの提案により1965年に第一回の研究集会が箱根のホテルを会場に専図協行事として実施されたのをはじめ、1985年まで20年に亘りほぼ毎年場所を全国各地に変え、討議テーマも毎回新しく設定。泊り込みで開催。JSKから毎回何人か出席、報告討議に参加した。専門図書館の取組むべき課題を幅広く取上げた。

会社史研究・ユニオンリスト編集

会社史や経済団体史は認知度が低く刊行の事実を把握するのが困難であったので専図協に働

きかけ有力所蔵機関協力による総合目録を作成出版。1966年第1回社史研究会、1976年社史・経済団体史総合目録刊行以後年2回追録現在まで続く。

資料展示会

従来の官庁資料展示会に加えて、新しく民間・団体資料展示会を発足させる。1968「年第1回。経団連図書館との共催も含め各種民間資料展示、1986年IFLA東京総合資料展に専図協ブース参加。

労働分科会

労働関係欧文ユニオンリスト（1963）、レファレンスブック（1964）をはじめ各種労働関係書誌を作成。

国際活動

欧米およびアジアの専門図書館事情についてのメンバーの研究成果を専図協活動に反映、SLA、IFLA大会に率先参加するなど国際化を切り拓く。

各種関連団体の設立支援

大手町資料室連絡会 1968 -
日本索引家協会 1977 - 1997
経済文献研究会 1979 - 1999
企業史料協議会 1981 -
図書館サポートフォーラム 1996 -

3. JSKメンバーによる所感

前記のとおり解散フォーラムに先立ちメンバー各位に最近までの経歴や主な著書等とともにJSKに関する所感をアンケート形式で回答していただいた。この所感をアンケート形式で回答していただいた。この所感を各人ごとに原文のまま、以下に紹介する。入会の古い順に掲載、(一) 内所属は一九七一年十一月当時のものである。見出し経歴は編者。

4. 各人経歴

前園 主計 (日本生産性本部図書室)

(経歴) 青山学院女子短期大学教授・図書館長、山梨英和大学教授、IFLA著作権委員

近藤 一衛 (国立国会図書館調査立法考査局)

太田 泰弘 (味の素中央研究所)

(経歴) 味の素食の文化センター主任研究員、文教大学国際学部教授、日本規格協会

河島 正光 (機械振興協会経済研究所)

(経歴) 河島研究事務所、産業能率短期大学教授・図書館長、産業能率大学講師

井上 如 (野村総合研究所)

(経歴) 東京大学文献情報センター助教授、学術情報センター教授・副所長

花房 征夫 (アジア経済研究所)

(経歴) 同図書資料部長、韓国産業研究院アドバイザー、亜細亜大学研究員

個性溢れる会員の熱意

前園 主計

○経歴

1956-1974

日本生産性本部(図書室長)

1975-2001

青山学院女子短期大学(教授・図書館長)

2002-2008

山梨英和大学(教授・図書館長)

○関係機関

専門図書館協議会(各種委員会委員長)

情報資料研究会

日本ドクメンテーション協会(理事)

日本図書館協会(理事)・著作権委員会(委員長)

三田図書館・情報学会

日本図書館情報学会

日本図書館研究会

記録管理学会(理事)

日本私立短期大学協会図書館委員会(副委員長)

私立短期大学図書館協議会(会長)

文化庁著作権委員会第8(複写複製関係)小委員会

文化審議会著作権分科会図書館ワーキンググループ

ループ

文化庁国際課アジア太平洋著作権会議

山梨県立図書館—図書館協議会（副委員長）

国際図書館連盟著作権等法的問題委員会（IFLACLM）（日本委員・委員長補佐）

○大学等

和光大学、産業能率短期大学、青山学院大学、

亜細亜大学、広島文教女子大学、山梨英和大学（各非常勤講師）

○主な著書・論文

「単著・単編著 読書法」（日本経済新聞社 1970）

「情報活用法」（中央経済社 1981）

「図書館資料論」（東京書籍 1983）

「読む技術」（日本経済新聞社 1985）

「図書館サービス論」（東京書籍 1998）・同新訂版（2009）

論文専門図書館の定義（Library and Information Science. No.14）

専門図書館の存立基盤（青山学院女子短期大学紀要31輯）

女性の情報生活に関する研究（青山学院総合文化研究所年報 No.1）

経営における情報の需要（情報管理 Vol. 11 No.9）

資料と著作物の相違（山梨英和大学紀要第6号2007）

○趣味

テニス、機器いじり（オーディオ、カメラ、パソコン等）

○JSKに関する所感

1961年夏の初め、経団連資料部の三浦部長と末吉さんが、生産性本部図書室に、帰国したばかりの私を訪ねてきた。私がコロンビア大学で米国の専門図書館を中心に学び、米東部の約30の専門図書館を見学してきた成果を披露してもらいたいとのことだった。専門図書館の若手実務家に声をかけ、その集まりで話してもらい、これを契機に継続的な研究会を発足させられないかとの相談に及んだ。こうして、経団連で持たれた1961年8月11日の会合が「情報資料研究会（JSK）」の発足だった。

月1回の会合では、誰かが発表することにした。10名前後の構成員であり、各会員は年に1度は発表せねばならず、このための調査や研究が半ば強制された。しかし、会合での発表や議論および情報交換は、適度な緊張感も伴い、楽しかった。

そのうちに、「資料でなく情報を扱う感覚が必要」や、「図書館の優劣は人に尽きる」等と

いった思想を共有し、また最新の情報を得る場となった。このような、当時としては先駆的な思想を持つ各会員は、やがて専門図書館界のみならず日本の図書館界の随所で活躍するようになり、館界ひいては社会に少なからず貢献することとなった。

JSKが、これほど長生きするとは思っていなかった。たしかに、JSKは、当時のわが国の経済発展や技術進歩に伴って専門図書館が脚光を浴びるという時流にも乗っていた。さらには、団体の運営が上手な末吉さんもいた。

しかし、JSKが長続した最大の理由は、個性溢れる各会員が、図書館に対する強い熱意を持ち続けた点にあると思う。これがあったために、JSKは、少なくともインターネット時代直前まで、存在意義を失わなかったのだと思う。私は今、JSKの会員であったことを誇りに思い、会員と親しくしてきたことを倅に感じている。

「民」主導の先駆者的役割

近藤 一衛

○経歴

富士短期大学教授、同副学長兼図書館長、東京富士大学講師

○著書

「日本の商工政策」(教育出版 1971年)

「西ドイツの経済と産業」(筑摩書房 1975年)

○JSKに関する所感

私がJSKに入会したのは1962年である。この会が発足したのは1961年8月であるから、その翌年に入会したことになる。すでに40年、50年近い年月が経過したので、その後の経緯については殆ど忘れてしまった。ただ資料によれば、入会当時のメンバーとしては、大田(味の素社)、河崎(日本鉄鋼連盟)、国分(日本開発銀行)、末吉(経団連)、浜田(慶大)、前園(日本生産性本部)の各氏、及び私の計7名であったが、その後は次第に増員して、10年間で会員数が倍増したことは覚えている。

JSKは、会則によれば「産業界における情報資料活動の充実と会員相互の資質の向上をは

かること」を目的として、主題探索方法、レファレンス・サービス、及び海外におけるドキュメンテーション等の研究を行うことになっている。そして、現実には概ね月1回の割合で会員持ち回りの形で例会が開催された。図書館や資料部門の実態、ドキュメンテーション、抄録の索引語、シソーラス、情報検索、図書館と図書館員論等、およそ情報資料活動にかかわる諸問題について、自由闊達な意見が交わされた。

ところで、私のように比較的規模の大きい図書館に在職している者にとっては、往々にして業務の仔細な部分に目が行き届かなくなる場合が多いが、この点JSKの専門的資料マンからご啓示をいただいたことは大きかった。

私はその後、調査マンとしての管理者になったので、JSKからは次第に疎遠なっていくた。しかしJSKが、日本経済の高度成長期において、情報資料活動の在り方につき貴重な見解を提示し、「民」主導の下で先駆的な役割を果たしてきたことは、誠に素晴らしいものがある。そして今日のような高度に発展した情報化社会の一端を築いたものとして、JSKの活動は高く評価されて然るべきであると思う。

ドキュメンテーション技術を取り込む

太田 泰弘

戦後の混乱期にあつて、入手しにくい資料をいかに手にいれるかに専門図書館員の手腕がかかっていた。門外不出であつた所蔵資料を相手に公開する代わりに、相手からも貴重な資料を入手するという期待感がJSKを産む直接の動機になったといつてよい。欧米先進国ですでに日常業務となつていたドキュメンテーション技術(日本では情報管理という用語で普及した)を積極的に取り込むことが、その裏にある高邁な動機であつた。当時使われはじめたコンピュータを道具として利用したいという夢の実現にむかつて、メンバーはがむしやりに働いた。講演、投稿、そして研究グループの結成など、古い記録を取りだしてみれば、よくもやったものだという思いにかられる。

夢は1990年代には達成された。ドキュメンテーションという専門用語はもはや使われなくなり、インターネット、ウェブ、ブログなどが幅を利かす。インターネットを通じて多量の情報が提供され、いかに捨てるかに苦慮する現状にあつては、高度成長期の体験談を若い世代に語ったところで嫌われものになるだけである。一方で、アナログからデジタルへの変貌についてゆけないという年寄りの焦燥感が彼らを

かきまわす。

高齢者が若い人々の議論の場に加わることは、とかく非難のまとなる。その中でただ一つ、参画できるテーマがある。歴史の分野である。この分野は若い人にはできない。歴史的体験がないからだ。情報がデジタルで流通するといっても、最終の利用段階ではゼロカワンのデータでは利用できないから、アナログに戻すことになる。ここでは、アナログ時代の体験が役立つこともある。科学技術に文化的配慮が望まれる時代となつて、その可能性は高まつている。J S K時代の記録をきちんと残すことも、後継者への配慮の一端といえよう。

○J S Kに関する所感

家中に古本があふれ、通学途中に神田古書店街があり、文献志向の上司に恵まれたという少年時代の環境が、ドキュメンテーション活動にのめりこむ動機になった。この環境は今も続き、文献目録や用語集の作成が健康維持の源となっている。データベースの形で残せば後継者に役立つはずだと、ことあるごとに周囲に提案しているが、趣旨に賛成しても実行に移す人が少ないのが残念である。

私にとつての情報資料研究会

河島 正光

昭和38年春、神奈川県立図書館から機械工業振興協会・図書資料部（＝当時、昭和41年秋に改組され、機械振興協会・経済研究所資料室となる）に転職した。「公共図書館」すなわち地域共同体（Gemeinschaft・communityの一種）の図書館から、「専門図書館」の一類型である特定集団向けの図書館への転進であった。そこで、学生時代から面識のあった前園さん（日本生産性本部に勤務＝当時）を訪ねて、「専門図書館」界の事情について教えを乞うた。その折りに情報資料研究会に誘われ、早速、参加した。

情報資料研究会は、私にとつて、各種の「専門図書館」について学ぶよい機会となった。

会員それぞれの活動ぶりに学び、また会合の際の活発な議論に啓発されることが多かった。会員各位が働く場はすべて同じ性格なのではなく、異なる性格の場での実践に基づいて意見が出されることによって、単純に類型化する短絡的な見方ではない把えかたを鍛えられた。

学術文献に偏重せず実務的な資料に着目する姿勢も、情報資料研究会の諸兄から受けた刺激によつて醸成されたと言つてよいだろう。機械振協時代（10年）は、各国の統計資料や会社資料

を体系的に把握することに努めた。それにづく四年間の個人事務所（フリーランスのコンサルティング・ライブラリアン、4年）の時期には、その間に接したいくたの事業組織の個別の状況から多くを学んだ。またこの時期に、多くの人々の協力を得て『日本統計索引』をつくることができた。その後の産能率大学時代（11年）には、短期大学・大学両図書館の新館建設にたずさわるかたわら、マネジメント教育を基盤とするこの大学の風土のなかで、事業組織内外の資料を、マネジメントの視点で整理・把握することに努めた。その結果を新設の「文獻情報管理コース」の教育課程に取り込み、『ビジネス資料概説』にも取り込んだ。

「大宝令」（大宝元年、西暦701）の職員令は今に伝えられていないが、養老年間に補修された「養老令」（西暦720前後）は伝えられている。神祇官に次ぐ太政官に八省あり、中務省のなかに「図書寮」が定められている。わが邦の文献に残る最古の「図書館」である。

大和朝廷という国家統治機構のなかの「図書館」である（その事情はメソポタミヤエジプトの古代国家の例に通じる）。わが邦の場合、冷泉家の時雨亭文庫（歌の道という「家学」を守る）や、降つて、徳川家の紅葉山文庫などは、今日に至るまで伝えられている。これらは、今

日の用語で言えば「行政」機構が業務遂行のために設けられた。

すなわち、事業組織という目的集団 (Gesellschaft: association) の資料部門こそ各種の「図書館」の祖型であるという私の図書館認識がたちづくられた。それをより一般化して、事業組織の意思決定過程を支える情報管理体系のなかに資料部門を位置づける考えに至った、その考えを基盤にして、ビジネス・ライブラリー論やビジネス資料論を展開してきた。

ひるがえって思いみると、その後私がたどった途の原点は、情報資料研究会の活動のなかにあったのであろう。

感想

井上 如

○経歴

- 1977 東京大学情報図書館学研究センター
- 1983 同上 文献情報センター
- 1986 学術情報センター
- 1999 同上退職

○主な著作

- 「九州一周浪漫ウオーク」(日外アソシエーツ 2004)
- 「塩の道ウオーク」(日外アソシエーツ 2007)

○JSKに関する所感

43年間の□(はこ)もの暮らしを辞めて、アウトドアライフに切り替えて10年余りになる。書き物「身辺整理の心得」(日経新聞社)できっかけを作り、関西へ住み替え、それにとまって□もの時代の記録と資料を一切廃棄したこともあってか、リバウンドはない。

「一生二生」(一回の人生で二度生きること) 福沢諭吉・「文明論之概略」(参照)に踏み切った以後、付き合う相手がウオーカーという、下半身中心の、首の上には頭もあるが、歩く際にバランスをとる振り子の役目しかない、しか

し一方で本当に素晴らしい連中ばかりなので、43年間の記憶もほとんど失せた。

JSKで思い起こすこととしては、いつかどこかで集まって俳句を詠む会があったことと、松下緑さんが「図書館員と胃腸病の関係をもつと研究すべきだ」と発言したことくらいだ。しかしこれらも、JSKの集まりだったかどうか定かでない。

JSKのこと

花房 征夫

1. 私とJSKの出会い、機械振興協会資料室におられた河島正光さんの「引き」による。河島さんは当時、資料室機関誌「資料ガイド」に連載されていた「専門図書館紹介」との関連で、おそらく1967、8年頃、「アジア経済研究所図書館の利用案内」の執筆のことで来所され、この時はJSKの存在を知った。私は当時、27、8才の若輩で、河島さんの推薦によってJSK会員の末席に座るようになった。その後まもなくジェトロから藤田さんが入会し、若干遅れて機振協の坂本さんが参加して、JSKメンバーが最終的に固定化したと記憶している。

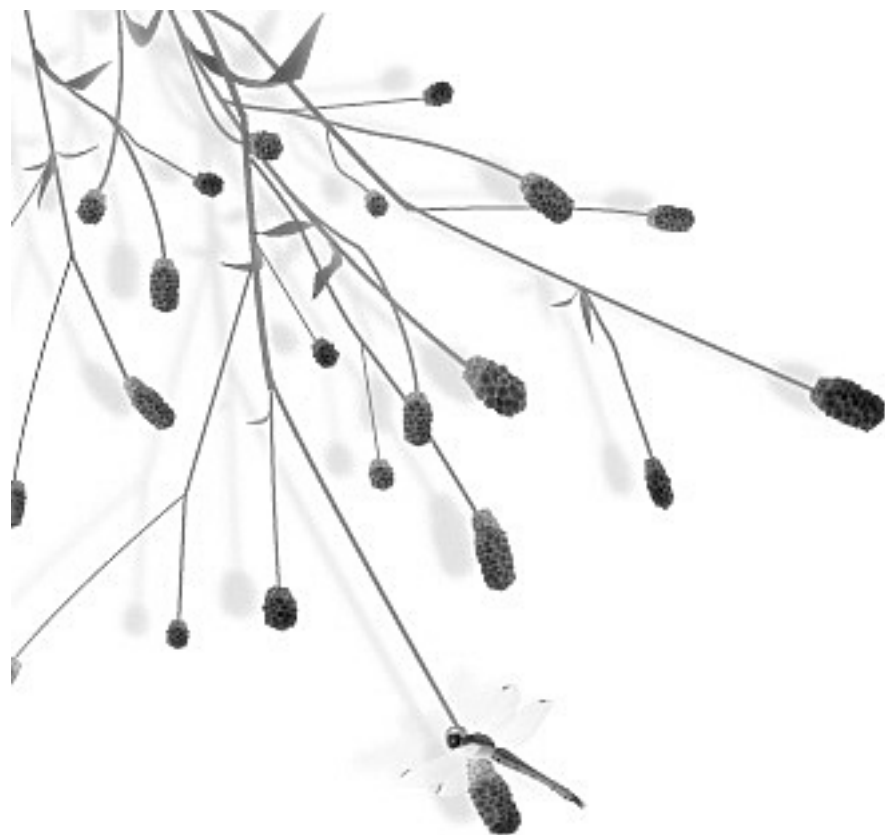
2. 当時の会合で感じた点は、JSKは「一家言の士」的集合体で、図書館員的な職業的な「臭み」を殆ど感じない勉強集団であった。会合での話題は図書館のことのみならず、政治、経済、産業、社会、さらには外国問題などにも拡大し、そうした世界に疎かった私は「拝聴」するしかなかった。私は一時期、JSKメンバーは図書館界に収まらない、やがては学会などに移動する人達というイメージを抱いたほど、諸先輩の話しには内容があった。それからアル

コールに対してめっほう強かった諸先輩にも驚きで、この点でも下戸の私は「場違い」を感じるしかなかった。

3. 私がJSKで知ったのは専門図書館や専門図書館員の多様性、異質性の具体的な状況である。専門図書館は「公共図書館や大学図書館などには括れない、その他図書館グループの別称」なことがよく分かった。

それから図書館員という職業をとすれば機能論的に考えていた私にとって、新日鉄資料室長飯田さんの技術問題報告などから、サービス対象分野の深い理解を欠いては研究図書館での仕事は進められないことを学んだ。また、JSKの多くの会合から、図書館員は業種や性別、年齢などを一切問わず、頑張っている人々との面識、出会いが大事なことも教えて貰った。

振り返ってみると、JSKはインターネット以前の時代ではあるが、戦後図書館界の中で大変ユニークな実践力をもっていた「専門集団」といえるだろう。



— 後 記 —

遅くなりましたが、「ふぉーらむ」7号をお送りします。

後記を書くたびに、猛暑や豪雨など天候のことが多くなるのですが、ここ数年何かしら記録更新されていくので、むべなるかなという感じです。図書館や出版の運氣も、天候に負けず上がってくれるとよいのですが。

(岩本)

7号は総勢12名が執筆参加。各執筆者とも、おのが領土を出で数寄の世界に遊んだ内容となりました。これを受け事務局としては、「ふぉーらむ」とは別に、ニュースレターにもエッセイ欄を(毎号1名限定)設けたいと思っています。有志は事務局宛原稿をご送付下さい。適宜掲載していきます。

「JSK 創立50年・解散記念特集」のレポートは、主に1960年代に活躍したメンバー7名が同会の歴史をふりかえるものであり、創立50年のモニュメンタルな勝鬨と見ました。これはこれは、結構「いけた会」ではないかと傍目に微笑みました。

(森本)

ふぉーらむ 第7号

2010年10月12日発行

発行人 山崎久道

製作 森本浩介／岩本謙一／齋藤香織

発行所 図書館サポートフォーラム

〒143-8550 東京都大田区大森北1-23-8

日外アソシエーツ(株)内

TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845

http://www.nichigai.co.jp/lib_support/index.html
